

第106図 水場遺構最下層出土遺物 (3)

26～29は平口縁ないしは小波状となる晩期安行式の鉢である。26・27は波頂部下の円文を起点に三叉文や入組帯縄文を配す。同一個体の安行3a式である。28はB突起状の二山の突起下に三叉文を配し、これを起点に横位に弧文を展開する。第4号木組遺構出土土器(第73図20)や第1・2号導水溝状遺構出土土器(第94図3・4)、第3号導水溝状遺構出土土器(第95図25)と同一個体である。29は口縁部内面に稜を持つ浅鉢であろう。30は器壁が薄く焼成堅緻で、頸部の無文部は光沢を持ち、かなり異質である。突起はB突起状である。

31・32は対向三叉文を持つ。33・34は胴部が張り、口縁部は短く屈曲する壺形である。

35は縦位区画と菱形区画文からなる姥山皿式系のモチーフを持つ。36は内湾する平口縁深鉢で、条線文や縄文は無く、並行沈線で斜線文や弧線文を描く。37は頸部が括れ、口縁部が短く外反する。頸部の線から弧線を横位に展開させる。

38～42は安行3c～3d式の深鉢で、38～40は平口縁、41・42は波状口縁である。38・39は三角形区画文を直線で表現する安行3c～3d式であろう。40は頸部が括れ、口縁部が外反する土器で、沈線区画内に単列の列点を施した斜線文や弧線文を持つ。41・42も沈線区画内に単列の列点を充填し、曲線的な文様を持つ。

43～46は安行3b～3c式の紐線文ないしは条線土器である。43・45は条線と口縁部に沈線区画を持つが、44・46にはこれが無い。いずれも二本沈線で斜線文や弧線文を描出する。45は沈線間にRL縄文を充填し、対向する弧線文間に列点を縦位に施文する。46の弧線文には列点を施す。口縁部区画は幅広で、列点は区画下端に配す。

47・48は無文の粗製土器で、47は後述の49～51ほどではないが、わずかな段が付く。48は竹管状工具の調整痕が著しい。口縁端部は細かく波打ち、輪積痕を明瞭に残す。49～51はいわゆる有段口縁の粗製深鉢である。

土製品 第106図52はミニチュア土器である。天地逆の方がしっくりくるプロポーシオンで、下部で一度括れ、底部で広がる。底面は平坦に削られている。器面には、体部の全面に無節Lを、また上部の数か所部分的に単節RLを施文する。

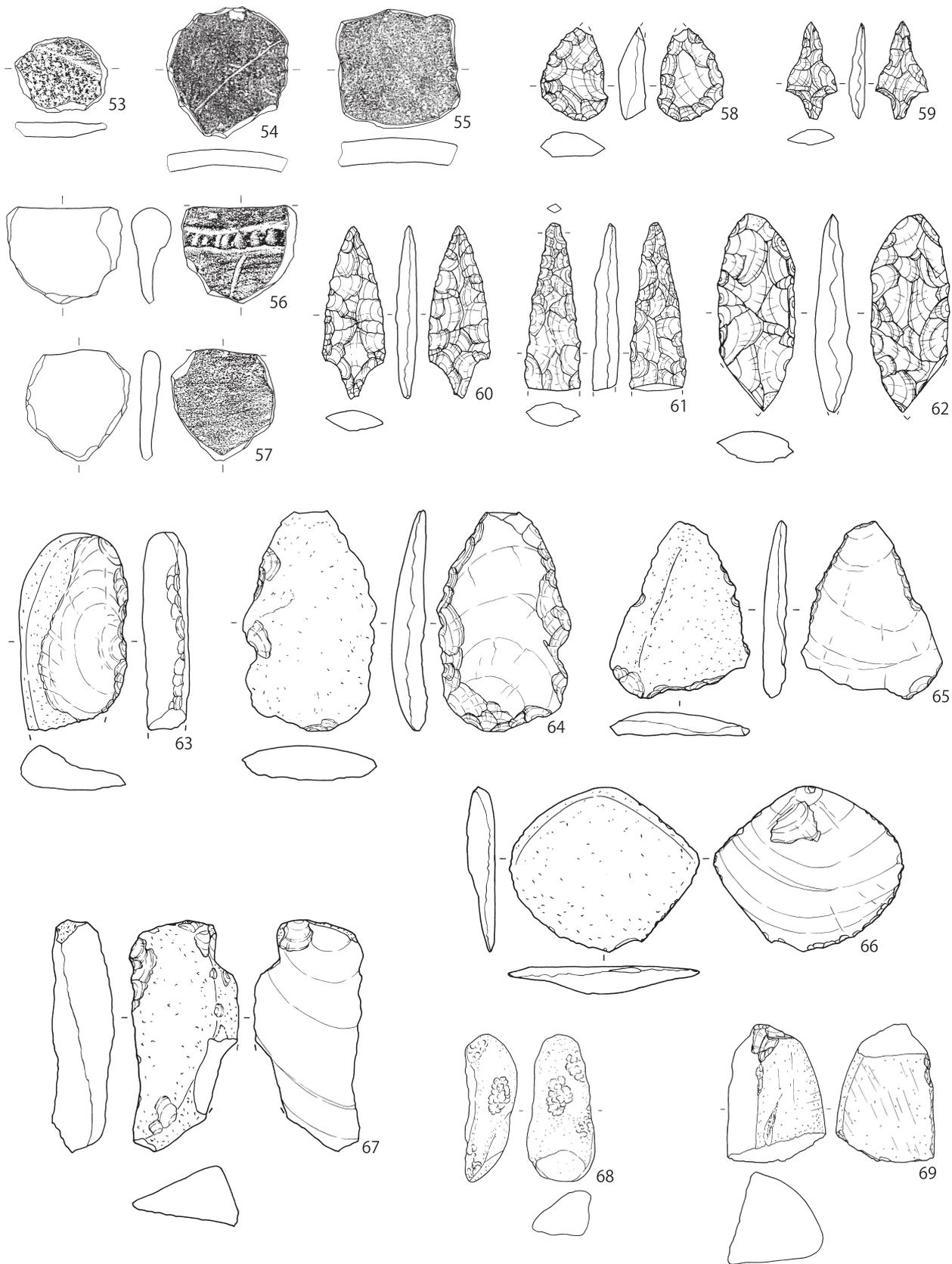
土器片加工品 第107図53～57は土器片加工品である。53は底部、54・55は堀之内式で前者は有文、後者は無文の胴部である。55は破断面の凸部を整え、方形に仕上げている。56は安行式の紐線文土器、57は後晩期の粗製土器の口縁部である。

石器 第107図58～60は石鏃である。58は剥離が縁辺全面に及ぶが、厚みや全体形状の点から未製品だろう。先端は欠損している。59・60は有茎鏃で、59は身部に変曲点をもつ、いわゆる下布田型のヒコーキ鏃である。60は茎に対し長身のタイプで、基部、身部ともに曲線基調に仕上げられる。61・62は石槍とした。62は基部側が欠損し、水流に晒された結果かかなり磨滅が進む。62は作りが粗く未製品の可能性もある。

63～67はスクレイパーとした。64以外は剥離性の乏しい石材利用のスクレイパーである。63は扁平礫の側面側からの剥離面縁辺に連続的な加工を施して刃部とする。64は側縁の全体片側からの粗い剥離を施す。65も二側縁に片面からの微細な剥離を施す。66は薄く剥いだ剥片の縁辺に微細な剥離が連続する。67は縦長剥片の鋭利な縁辺の一部に二次加工を施す。

68・69は敲石で、68は小型棒状石材の端部と側縁利用、69は破断面の縁辺利用で、二側縁に微細な敲打剥離が見られる。第108図70は全面の磨面、端部の敲打痕といった部位の使い分けがある。

71～73は石皿ないしはその関連品である。71は安山岩製の石皿を転用した磨凹石とした。台石や砥石類が完形で出土する一方で、石皿の完形品は一点も無く、転用も多い。なかでも71は、破片の縁辺を加工し整形する。表面に凹面となった石皿の機能面が残存し、下端の破断面には転用後に形

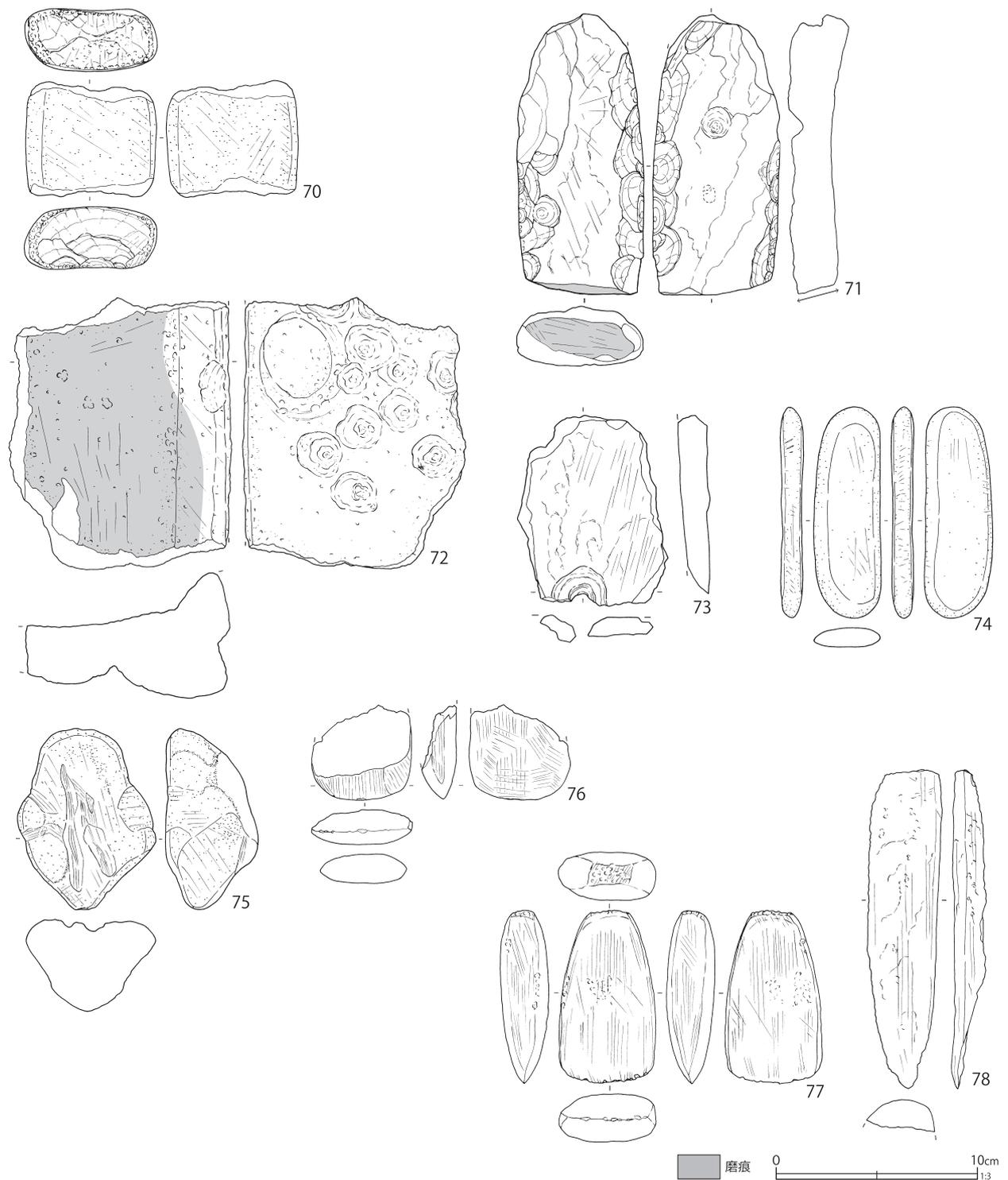


58 ~ 62 0 5cm
2/3

63 ~ 67 0 5cm
1/2

53 ~ 57 · 68 · 69 0 10cm
1/3

第107図 水場遺構最下層出土遺物 (4)



第108図 水場遺構最下層出土遺物（5）

成された顕著な磨面が発達する。72は有脚石皿の破片で、側縁が断面三角形に作出され磨面は顕著。裏面は深い凹穴が多数見られる。73は緑泥片岩製の石皿破片で片面のみ残存する。深い凹穴と顕著な磨面が発達する。

74・75は砂岩製の砥石である。74は扁平礫を素

材とし、表裏面には長軸、側縁には短軸方向の擦痕が形成される。75は有溝砥石である。2面利用でうち1面に砥溝が形成されている。

76・77は磨製石斧で、77には着柄痕と思しきあばた状の痕跡が見られる。

78は石棒の破片である。

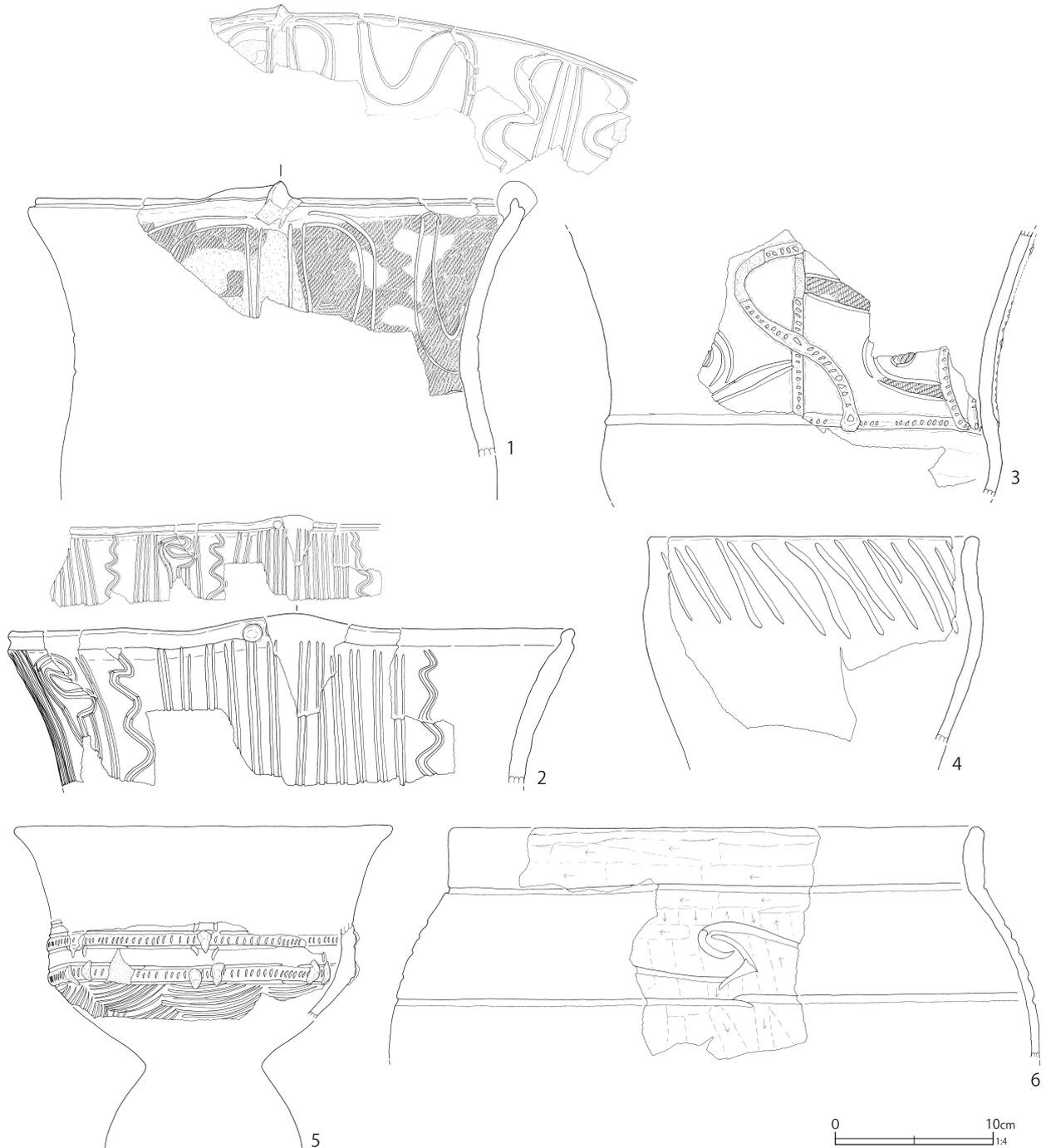
水場遺構一括出土遺物（第109～123図）

木組や木道をはじめとする遺構群や、谷（流路）の最下層出土遺物を除いた、その他の水場遺構出土遺物を一括する。

土器 第109～118図は縄文土器である。このうち、第109・110図は復元実測土器で、その他は破片である。

第109図1は縄文地に二本沈線で文様を描出す堀之内1式の平口縁深鉢で、胴部が張り、口縁部が外反する器形である。口縁部に突起を持ち、端部に沈線を巡らせる。文様は突起下部を中心に懸垂文や蛇行沈線文を描出す。

2は小波状となる堀之内1式の深鉢で、波頂部に對となる円文を配し、口縁端部に沈線が巡る。



第109図 水場遺構出土遺物（1）

無文地に竹管状工具による平行沈線で懸垂文や蛇行懸垂文を描出する。

3は胴部が張り、一度括れて口縁部へ立ち上がる堀之内2式の深鉢で、刻み隆帯で胴部と、これと直交する垂線で縦横に区画し、さらにS字状の隆帯で、縦位と横位の区画を結んでいる。モチーフは曲線的である。

4は胴部上半が張り、口縁部付近を斜行沈線のみで表現する。晩期中葉の可能性がある。

5は安行1式の台付鉢の胴部破片で、刻みをもつ二本の横位隆帯上に、上段は1個、下段は対の瘤を配す。

6は安行3c式の平口縁深鉢で、胴部が張り口縁部は直立する。地文は無く、頸部と最大径を横位沈線で区画し入組文を施文する。

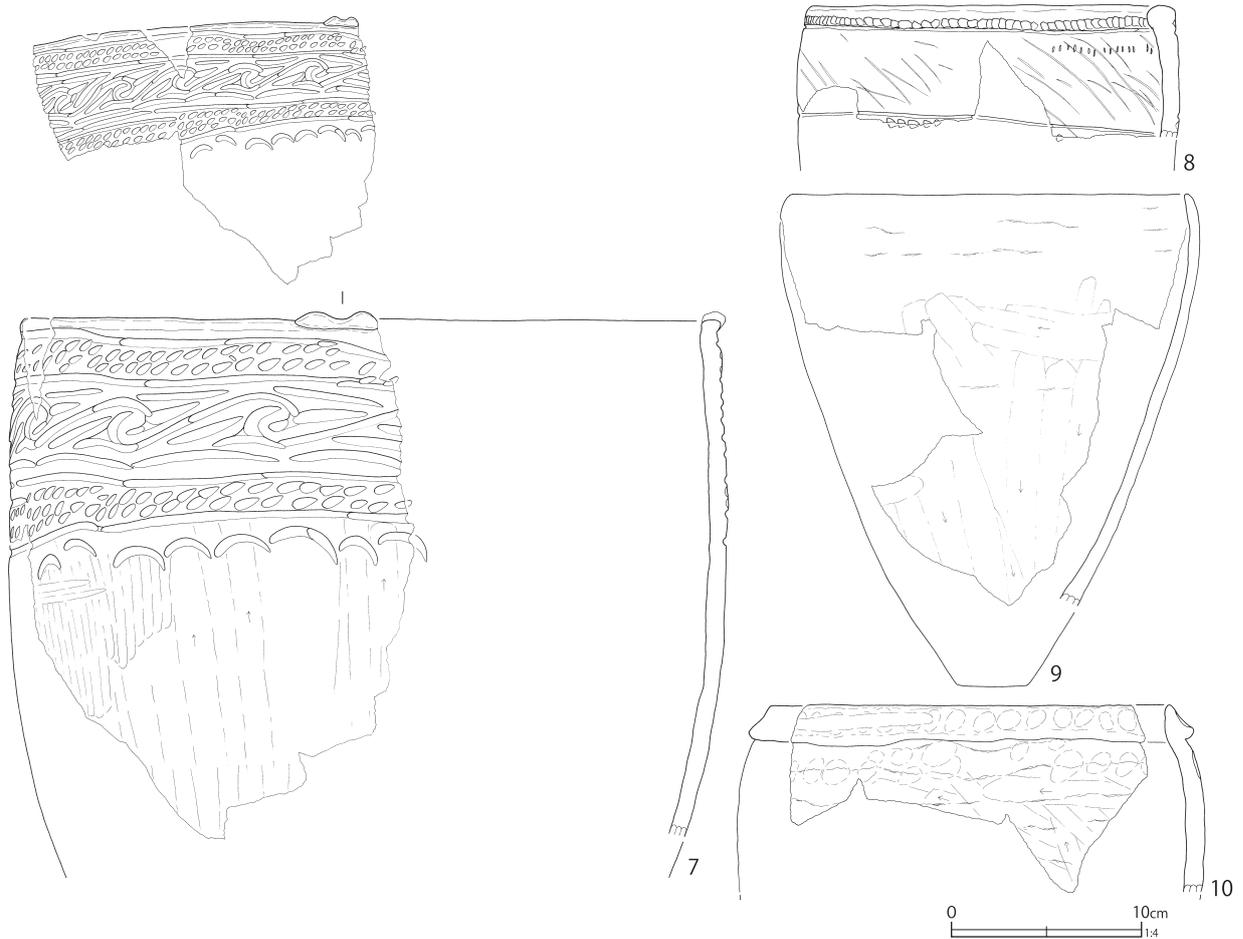
第110図7は安行3c～3d式の平口縁深鉢

で、口縁部にB突起状の二山の突起が付く。口縁部と頸部に列点の複列化した区画帯が巡り、区画内は入組三叉文を横位に展開する。

8は後期後葉～晩期前葉の条線文土器で、口縁部の沈線区画内に列点が巡る。最大径付近にも同様の区画をもつ。口縁部の沈線区画の下位には、列点施文に対応する工具痕が残る。

9・10は晩期中葉の無文土器である。9は砲弾形の無文の粗製土器で、口縁部付近に最大径を持つ。下半の調整が縦方向のケズリで、上部には輪積痕が残る。10は砲弾形の有段口縁粗製深鉢で、器壁は厚い。最終調整はケズリだが、口縁部と胴最上部は輪積痕と指頭押圧が明瞭に残る。

第111図11～14は早期条痕文期の土器で、11は鶉ヶ島台式で、本書では唯一の資料である。12は茅山上層式で、端部に刻みを、口縁部近辺に列点



第110図 水場遺構出土遺物(2)

文を施し、補修孔をもつ。13は底部である。

15～39は中期の土器で、15～21は阿玉台Ⅰb式、22・23は阿玉台Ⅱ式である。また、24～26は貉沢式、27・28は新道式、29～31は藤内式である。

15・16はともに二条の角押文を施文する口縁部破片で、21は同時期の底部である。17～20は口縁部が外側に開く平口縁深鉢で、同一個体である。口端部は肥厚し、楕円形区画文の接点に円形（18では方形）の突起を配す。区画内は角押文で蛇行文を施し、区画文の下位は結節沈線によるジグザグ文と横線文を、またその下位にはひだ状圧痕を横位に施す。これらの区画下の胴部には、口縁部より小規模の突起を配す。

22・23は阿玉台Ⅱ式で、22の口縁部は短く外反し内面に稜を持つ。竹管状工具による平行沈線ないしは列点を施す。23は嘴状の突起を付す。

24～26は貉沢式の土器片で、24・26は同一個体である。24は頸部が括れ、口縁部が開く器形で頸部は無文帯となる。口縁部文様帯には、押圧を施した縦位の貼付文を持ち、文様帯を区画する隆帯に接続する。頸部の無文帯を挟み、胴部は楕円形区画文が横位に展開する。口縁部文様帯内や、頸部無文帯に沿って、また楕円形区画文内に集合角押文を充填する。25は口縁部がやや外反し、内面に稜を持つ。

27・28は新道式で、27は口縁部が半円の突起状となり、直下には中央の窪んだ円形貼付文をもつ。口縁に沿って三角押文を施す。28は刻み隆帯を持つ口縁部で、口端部は平坦で隆帯が突起状にせり出す。29～31は藤内式で、29は口縁部に、30・31は隆帯に沿ってキャタピラ文を持つ。32は渦巻文を持つ井戸尻式であろう。

33～39は中期後葉加曾利EⅢ～Ⅳ式で、40・41は称名寺式である。42は外反する胴部破片で、無文地に断面三角形の低隆帯で渦巻状の文様を対向させている。類例に乏しいが後期初頭から前葉頃の土器であろうか。器面を丁寧に磨いている。

第112図43～47は縄文地に沈線で文様を描出す堀之内Ⅰ式で、46は平口縁で、その他は波状口縁である。47を除き口縁部直下には沈線が巡り、45はこれが二条である。波頂部を起点に、43では垂線が、44では刻み隆帯が延びる。47は口縁部沈線を列点に置換している。

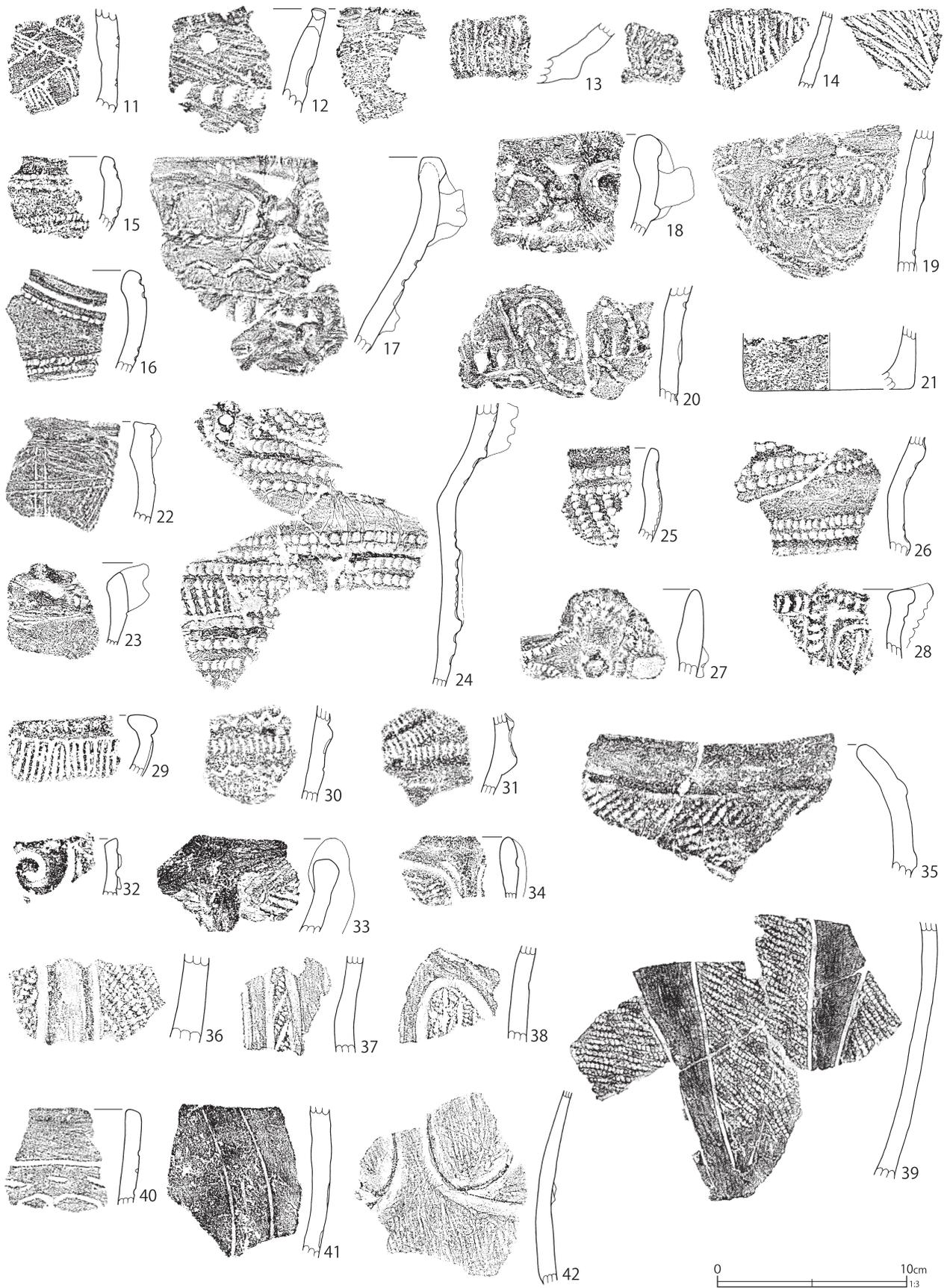
48～57・59は地文縄文を持たず、沈線や列点で文様を描出す堀之内Ⅰ式である。48と51は同一個体で、50は第109図2と同一個体である。口縁部に沿って、50・57は単沈線、48・49・51・54は二本沈線、52・53・55は沈線と列点を巡らせる。52は下部の沈線区画の代わりに、下端を強く屈曲させて口縁部を強調している。器壁が薄くやや異質である。56は口端部を先細に作出し、二段の刻列と二本の沈線が交互に巡る。類例に乏しいが、第3号木組遺構出土の第62図4と同一個体であろう。沈線とこれに沿った列点が垂下する。

58は櫛状工具による条線を持つ小波状の深鉢である。59は口縁部が肥厚し、端部を平坦に作り、天地が逆で他時期の脚台部の可能性もある。地文は無く、重弧線を等間隔に配す。

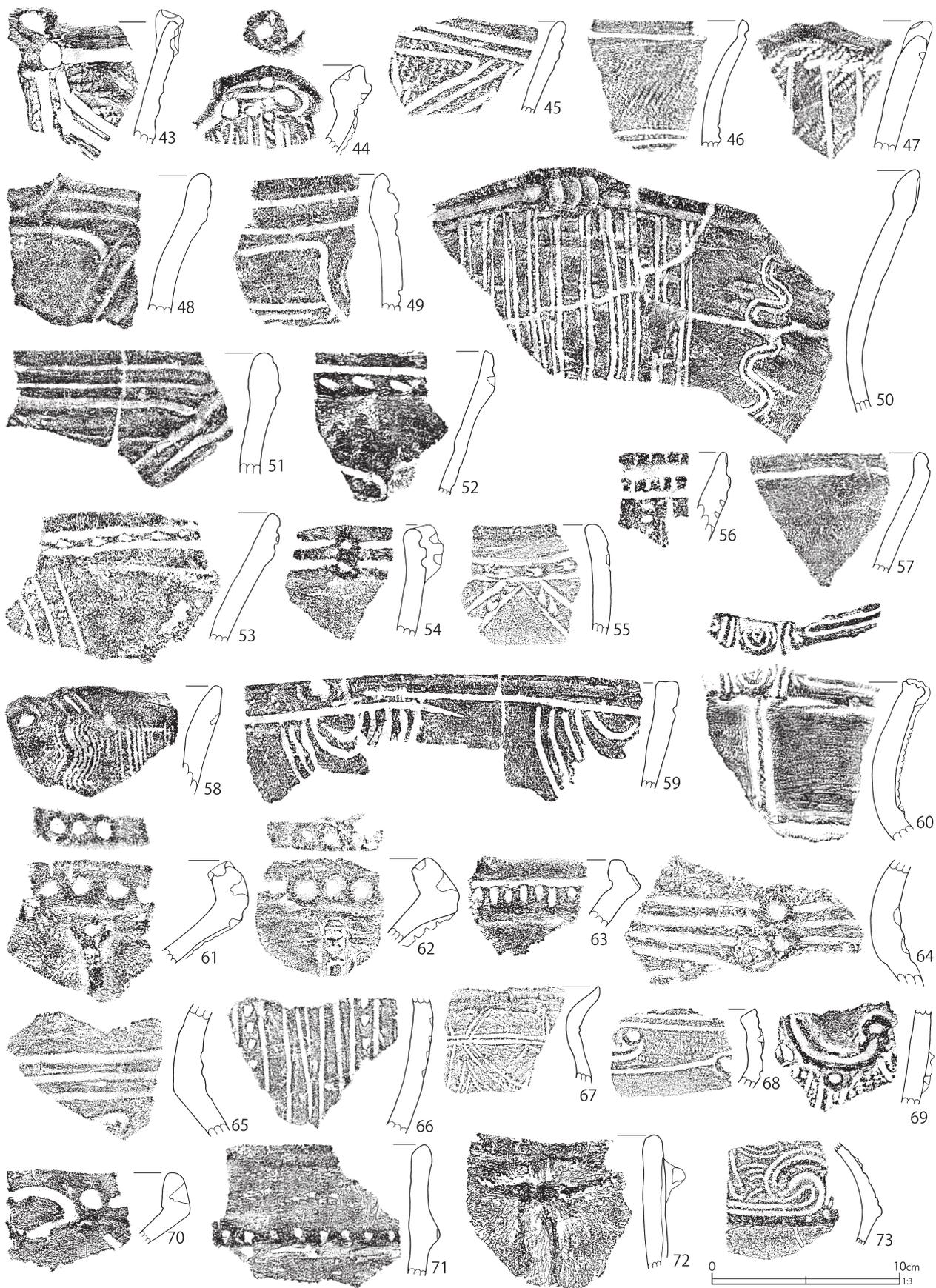
60は頸部で括れ、無文の口縁部が外反し、口端部の突起から刻み隆帯が垂下する。突起端部には同心円文、口端部には楕円形区画を持つ。頸部の区画隆帯の刻みは疎らである。

61～63は大きく外に開き口端部が内屈する深鉢で、61・62は口縁部外面と屈曲した上端部に大型の円形刺突を施す。口縁部から垂下する隆帯は、61では基点に円形貼付文を持ち、62では刻みを伴う違いはあるが、胎土は類似し同様の事例も無いことから、同一個体であろう。63は沈線下に刻列が巡る。

64・65は頸部付近の破片で同一個体である。地文は無く、括れた頸部に円形貼付文を二段に配し、太く浅めの沈線で横位、多重に区画する。器壁は厚い。66は多条の沈線を縦位に描き、沈線間に列点を充填する。67は口縁が外反し、口端部は



第111図 水場遺構出土遺物 (3)



第112図 水場遺構出土遺物 (4)

先細る。竹管状工具による平行沈線で頸部を横位に区画し、重弧線を描出する。

68・69はノ字状ないしはC字状の単位文を持ち、綱取式との関係が推測される。68の口縁端部は内削ぎ状で、口縁部に沿って二本沈線が巡る。口縁部文様帯内は細かい列点を横位に充填する。

70～73は深鉢以外の土器で、70は浅鉢、71・72は壺、73は注口土器である。71は幅広で断面三角形の刻み隆帯が巡る。72はわずかに内傾する、ミルクポットのような器形と思われ、口縁部に半円状の把手が付き、下位に二条の隆帯が垂下する。73の注口土器にも、綱取式のC字状文様を持つ。

第113図74～76は口縁部が外反し、縄文地に沈線で文様を描出する土器である。74・75は堀之内1式、76は堀之内2式である。75は内屈した口縁部の外面に沈線を持ち、74・76は内面に沈線を持つ。文様は、74は二本一単位の平行沈線、75は並行沈線、76は単沈線である。

77～80は堀之内2式の深鉢の口縁部破片で、78・80は平口縁、77・79は小波状である。77・78は口縁部に刻み隆帯を持ち、77は8字状貼付を配す。79は波頂部から刻み隆帯が垂下する。

81～87は堀之内式の深鉢以外の土器で、81・82は内文を持つ浅鉢、83～85は堀之内1式、86・87は堀之内2式の注口土器である。81は波頂部に押圧を加え内側に折っている。外面に8字状貼付文、内面には波頂部の対の位置に円形刺突を施す。

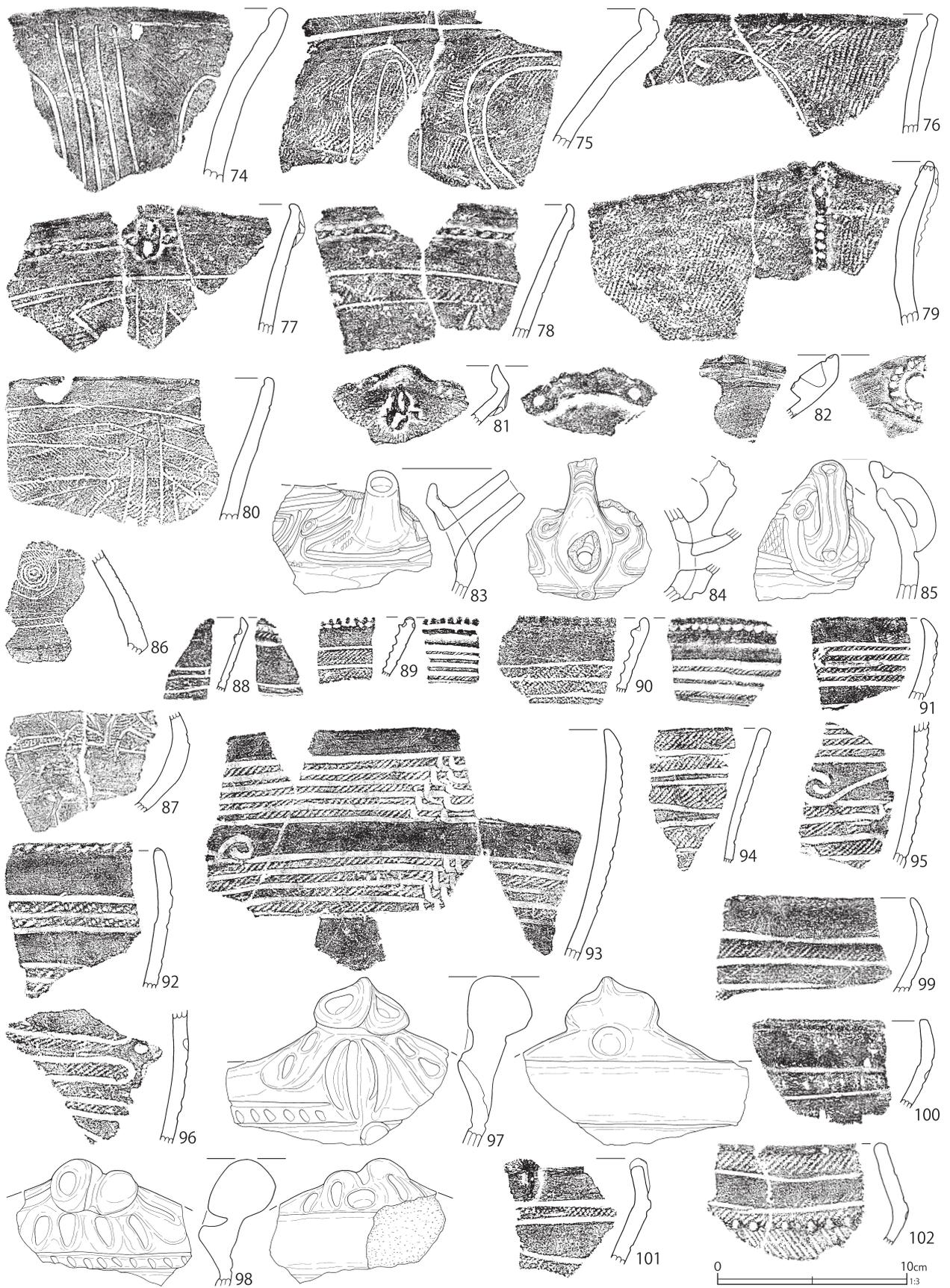
83は口縁部がわずかに残存し、地文縄文上に沈線で文様を描出する。84は微隆起線で文様を描出する。把手部両脇と注口部直下に、竹管状工具による円形刺突を施す。破断面が摩耗し曲線となることから、土器片加工品の可能性もある。85は把手にやや捻りを加えている。把手の上下の起点に円形刺突を施す。86・87は胴部で、86は極細の竹管状工具を用いる。文様の幅も狭く、縄文充填が困難だったのか、沈線が潰れている。

88～101は加曾利B式で、88～93は横帯文を持

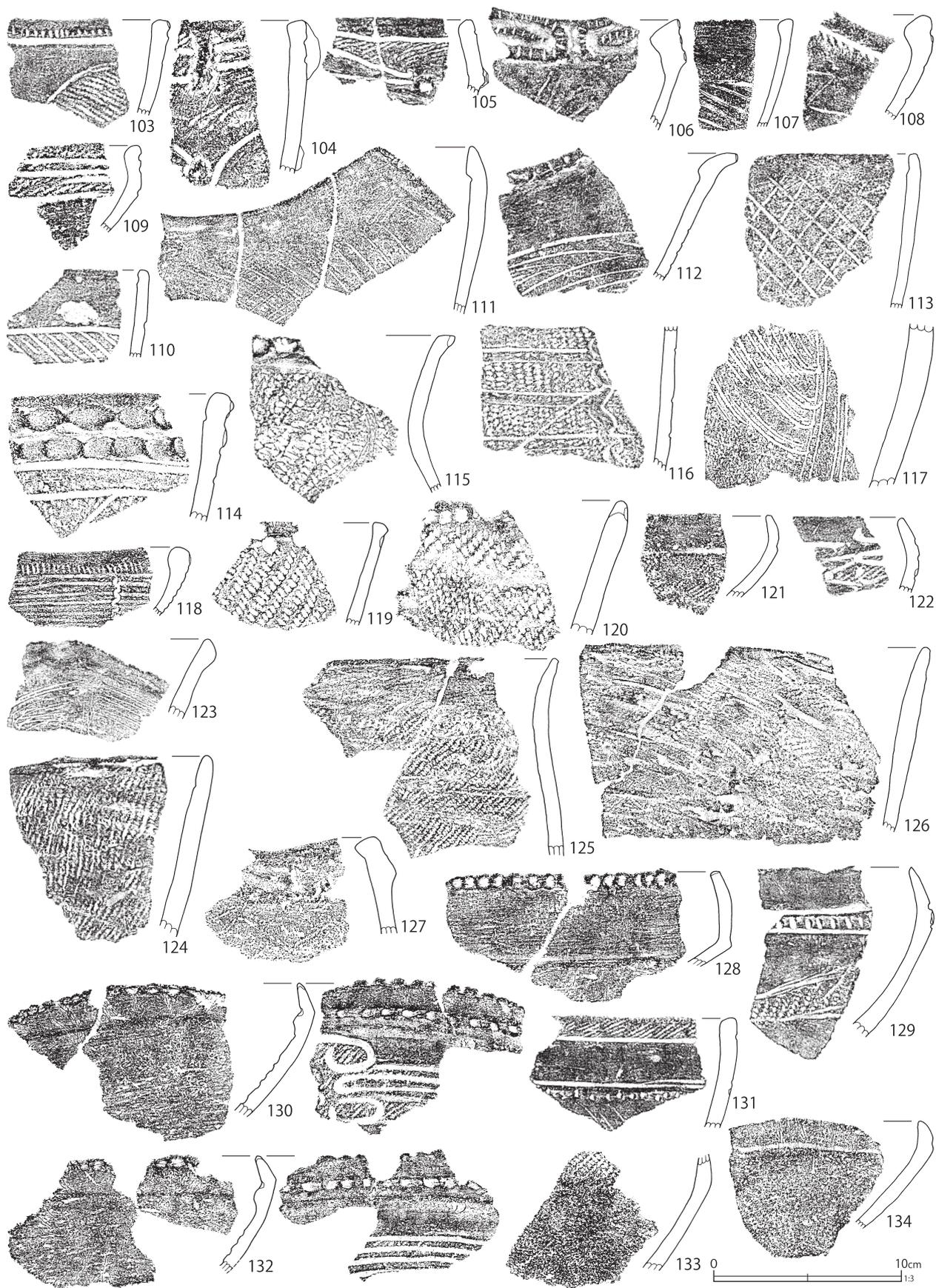
つ平口縁深鉢である。88・89の内文は縄文でなく刻みを持つ。89・92は口端部、90は内面に刺突列を持つ。91・93は口端部が先細りわずかに内屈する。ともに段違いの区切文を持つ。94は口縁部まで縄文を施文し、幅狭の磨消帯を持つ。95・96は横帯文と区切文から派生した文様と見られ、上下の沈線を一筆書きでつなぎ、九十九折にする。95は渦巻状モチーフを描出する。97・98は加曾利B2式の3単位把手の深鉢で把手内面に円文を持つ。98はやや軸をずらし、文様を変えることで左右非対称にしている。

99～101は口縁部内湾する無文の深鉢で、最大径に区画帯を持つ。99・101は縄文帯、102には列点を配す。101は上下の沈線を深く入れ、縄文帯を強調する。

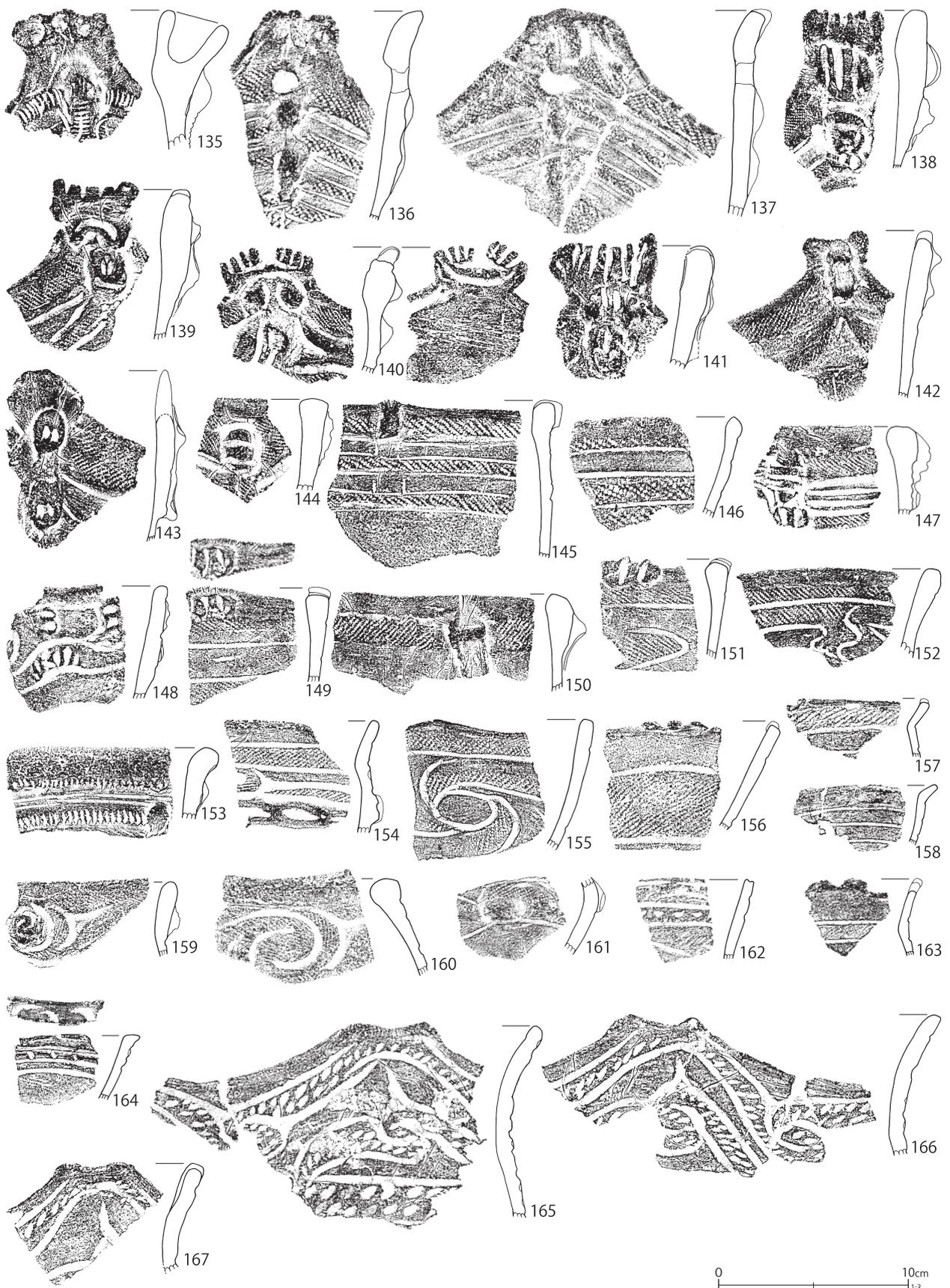
第114図102～112は曾谷ないしは高井東式である。102は鉢ないしは浅鉢で、最大径に円形刺突列を持ち、下位は棒状工具で斜線を施す。103は口縁に沿って刻列を施し、直下に円窓を配す。104は口縁部にノ字状の貼付文を施し、二本の横位沈線が巡る。直下に中央の窪む円形貼付文を起点に弧線を配す。部分的に無節Lを施文する。105は口縁部がくの字に屈曲し、口端部は内削ぎ状になる。屈曲部には中央の窪む円形貼付文を配し、これを起点に横線や斜線を施す。地文は無節Lである。106は波状口縁の波底部で、刻みのある隆帯により、口縁部に沿って楕円形区画を描出し、区画文内にも刻みを施す。第105図16と類似する。107・111・112は口縁部が内側に肥厚する土器で、胴部に斜線文を施す。107は平口縁、111・112は波状口縁深鉢である。111は口端部に刻列を持つ。108は肥厚した口端部に沈線と斜方向の刻列を持つ高井東式の波状口縁深鉢で、稲妻文を施す。109は口縁部がくの字に屈曲し、口端部は内削ぎ状になる。屈曲部より上が文様帯となり、横位沈線とLR縄文で文様を描出する。110は口縁部内面に沈線を持ち、胴部は沈線と斜線文が見られる。



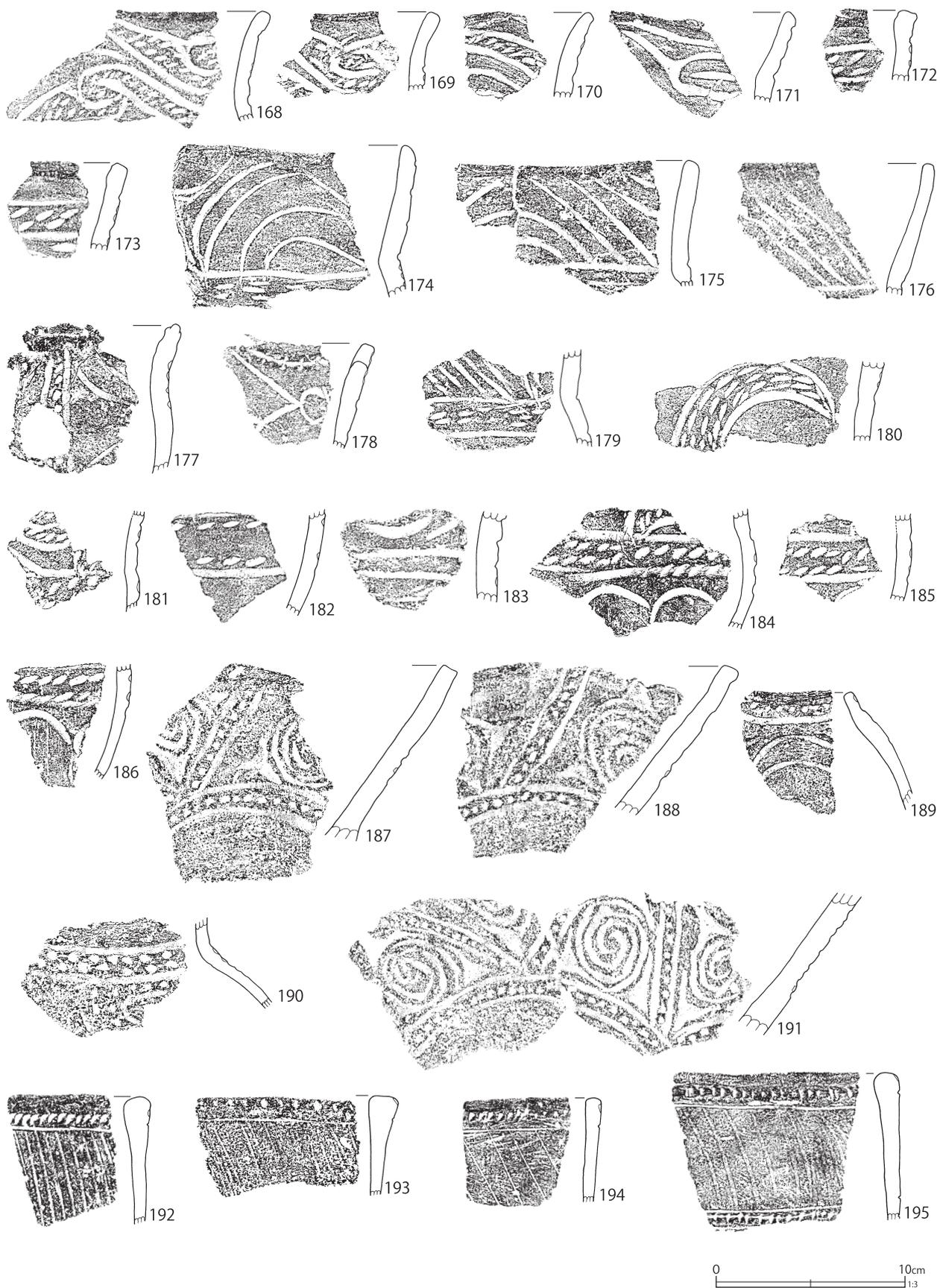
第113図 水場遺構出土遺物 (5)



第114図 水場遺構出土遺物 (6)



第115図 水場遺構出土遺物 (7)



第116図 水場遺構出土遺物 (8)

113~120は加曾利B式に伴う粗製土器で、113は格子目文、114は口縁部に二段の押圧隆帯を持つ。115は紐線文土器である。116は縄文地に竹管状工具による二本一对の平行沈線で垂下蛇行文を描出する。工具の内面が器面に当たり、沈線間は磨消と同様の効果を持つ。117も竹管状工具で、二本の垂線を起点に、上方へ跳ね上げるような文様を描出する。器面の乾燥が進行した段階でLR縄文を横位施文している。118は肥厚する口縁部に刻列を持つ。直下には横位沈線を多条に施し、コンパス文が垂下する。119・120は口縁部に列点を持ち、体部は縄文のみの深鉢である。

123は櫛状工具による条線をもち、124・125は縄文施文のみである。126は指頭整形の粗い調整で、一部にLR縄文を施す。127は口縁部の肥厚する波状縁の波底部で高井東式であろうか。

121・122・128~134は加曾利B式に伴う鉢・浅鉢類である。121は体部にLR縄文を持ち、122は沈線の末端や変化点の要所に円形刺突を配す。128は口端部に刻列を持つ。129は最大径に、沈線間に列点を充填する区画を持つ。胴部に縄文帯がある。130・132は内文をもつ浅鉢で同一個体であろう。口端と内面に刺突列を持つことで、口端部は漣状となる。130は「の」字状文を多段に配す。131は口縁部に縄文帯を持ち、無文帯の沈線区画直下に円形の刺突列が巡る。133は屈曲部上位に縄文がある。

第115図135~144は後期後葉~晚期前葉の安行式大波状口縁深鉢である。135は波頂部が円筒状となるもので、本書の対象範囲では唯一の資料である。隆帯に刻みが入る。136・137は台形状の波頂部に円窓が開き、直下に無刻の二段の貼瘤を貼付する。安行1式である。138・139・141は鱗状の波頂部を持ち、138は縦刻横瘤と横刻縦瘤と豚鼻状貼付文を縦列配置する。139はC字状の貼付文と豚鼻状貼付文を縦列に配置する。140は波頂部に縦刻の突起を左右に持ち、直下には対応する

位置に円形瘤を左右に1対配置する。安行2式から3a式であろう。142・143は舌状二段瘤を貼付する安行3b式期であろう。144は波底部である。

145・146・149は沈線で区画した縄文帯を多段に持つ。145は無刻の貼瘤を持つ安行1式、また149は縦刻横瘤を持つ安行2~3a式であろう。150は縄文帯に沈線区画が無く、背割沈線を持つ縦瘤を貼付する。147は横刻縦瘤と豚鼻状貼付文を縦列に配す。148は押圧を伴う貼付文を沈線区画内に縦横に配置する。151・152は沈線による弧線や蛇行線等を描出する安行2式である。

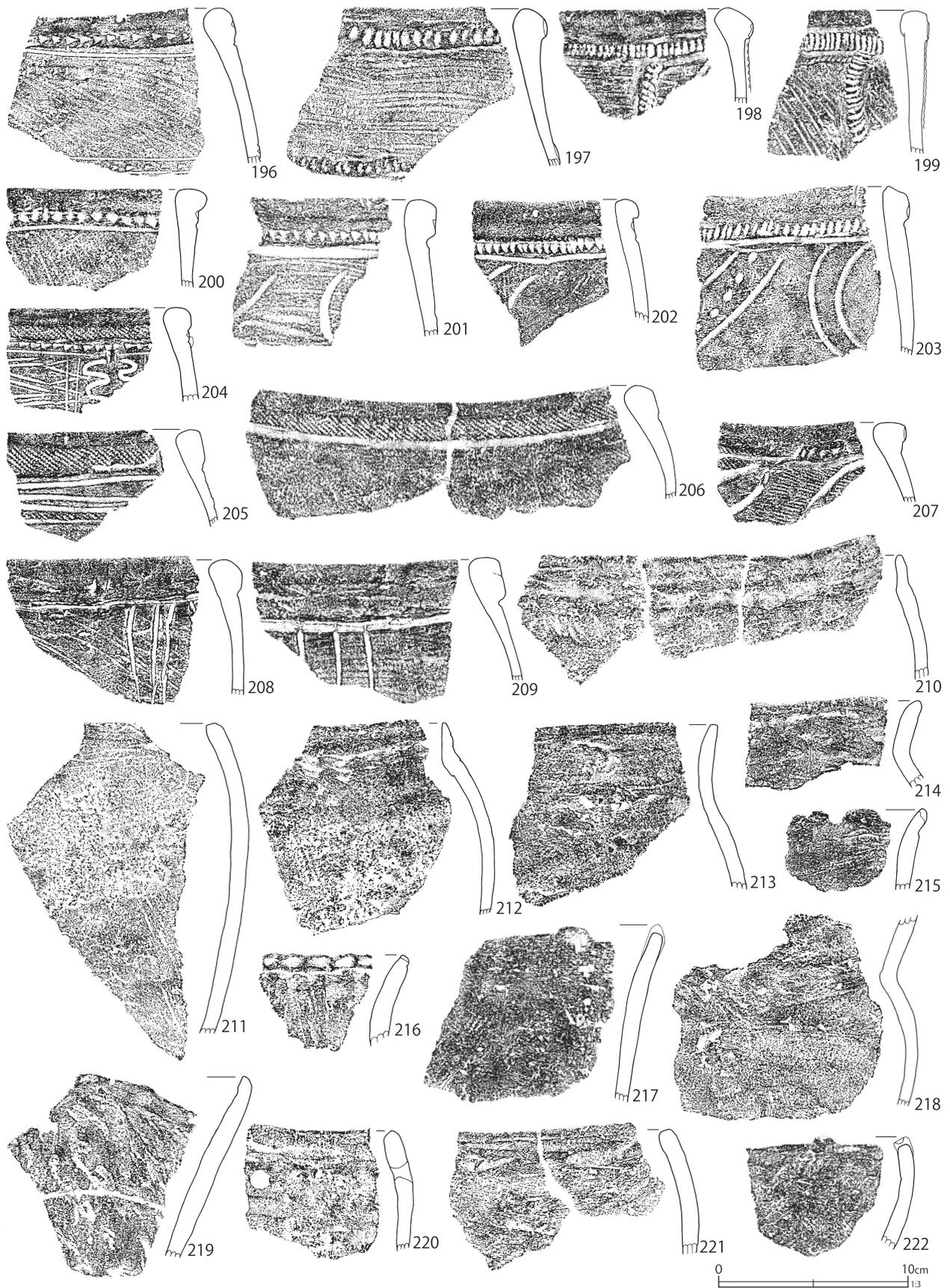
153は安行2式の台付鉢ないしは鉢で、豚鼻状貼付文を持つ。154は最大径付近に押圧隆帯を横位に連ね、上部に玉抱三叉文をもつ。155は口縁部が小波状となり、胴部には円文を巻き込む帯状入組文を持つ。安行3a式である。156は口縁部が外傾し口端部にはB突起状の二山の突起が二つ(以上)連なる。

157~158・163は器壁が薄く、焼成堅緻で、158の光沢を放つ無文部の調整は大洞式に近い。157は口端部にB突起が付く。第106図30と同一個体で、隣接グリッドの異なる層位で出土した。163の光沢は弱い、ミガキの単位を残さない無文部は異質である。大き目のB突起が付く。

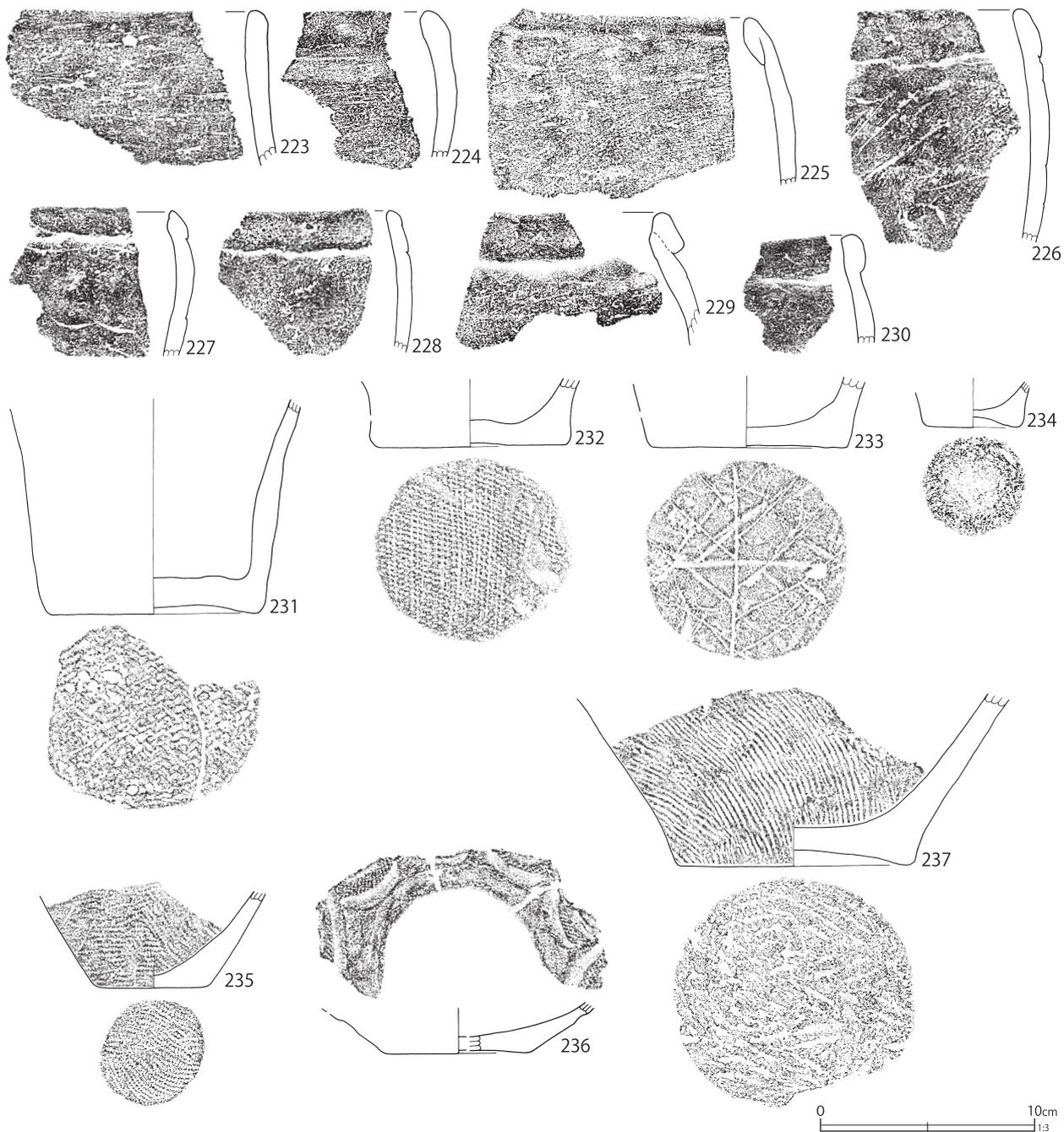
159は円形の突起を挟んで玉抱き状に三叉文が対向する。円文には渦巻状の沈線を施す。160は口縁部が肥厚し、「の」字状入組文と対向三叉文を描く。安行3b式を中心とした土器群である。

164は平坦にした口端部を加飾する浅鉢で、器壁は薄く、焼成堅緻で異質である。口縁部下の、沈線間の列点は羊歯状文の変形したものであろうか。無文部の処理は粗いが、大洞式の影響を受けたものであろう。大洞C1式に併行しようか。

第115図165~第116図191は安行3c式で165~171は波状口縁、172~176は平口縁である。165~169は同一個体で、波頂部は二山で入組三叉文を持ち、列点は複列化している。168・169は波底



第117図 水場遺構出土遺物 (9)



第118図 水場遺構出土遺物 (10)

部である。171の波底部にも入組三叉文が見える。172・173は口縁部が直立ないしは外傾し、列点は複列化している。174は口縁部が外傾する平口縁深鉢で、括れた頸部には複列化した列点を充填する区画帯が巡る。口縁部文様帯には三角形文が崩れほとんど弧文となった文様を、貧弱な沈線で描出する。175や176も同類であろう。

177・178は菱形文構成を取る姥山系波状口縁深

鉢であろう。178は菱形文との接点に円文を配す。

179～186は安行3c式の胴部破片である。いずれも列点は複列化している。180は副文様帯系の土器群で、弧線文内に列点を充填する。

187・188・191は晩期中葉の台付鉢で同一個体である。胴部下方に円形刺突列を持つ区画帯で、文様帯内を三角形に区画し、渦巻文と三叉文を充填する。安行3c～3d式にかけてのものか。

189・190は壺である。189は口縁部に単列の円形刺突をもち、190は頸部や胴部文様に複列化した円形刺突を充填する。

192～第117図196・200は後期後葉～晩期前葉の条線文土器、197～199・207は紐線文土器である。192～195・200は口縁部が直立し、縦位の条線を施す安行1式である。196は内湾気味に立ち上がり、横位の条線を施文する安行2式である。

202・203は条線が消失した段階の紐線文土器で、安行3b～3c式であろう。

204～206は肥厚する口縁部が帯縄文となる土器で、204は列点の、その他は沈線の区画を持つ安行2式であろう。207は地文縄文と沈線による弧線文を持つ安行3b式であろうか。208・209は紐線文系の土器だが、肥厚する口縁部に紐線も列点も無い。口縁部沈線から三本の沈線が垂下する。

210～第118図224は晩期安行式に伴う無文の粗製土器で、器形は211・221・222が内湾、210・212は口縁部が屈曲して直立気味になる。213・214・218は頸部で括れて外傾する。217・219は外傾ないしは外反する。215はB突起、217・222は小突起を口端部に貼付する。220に補修孔がある。

第118図224・225は口縁部が肥厚する粗製土器で、225は口端部を内面側に折り返している。

226～230はいわゆる晩期前葉頃の土器に伴う、砲弾型の有段口縁粗製深鉢である。

231～237は底部を一括した。231～234は立ち上がりが比較的垂直なもので、235～237は外に開くものである。233は木葉底、235・236は網代底で、233は置き直されたのか、向きを変え2回転写されている。234は外周の高い上げ底状で、235は縄文施文である。237は底面付近まで撚糸文を施文し、晩期末葉の可能性が高い。

土器片加工品 第119図238～第120図274は土器片加工品である。類型別では、238～241・243～250・267～245・246・248～250・267～271は胴部を素材とするⅡ類、242・251～266・273は口縁部のⅠ類、

272はⅢ類（底部）である。

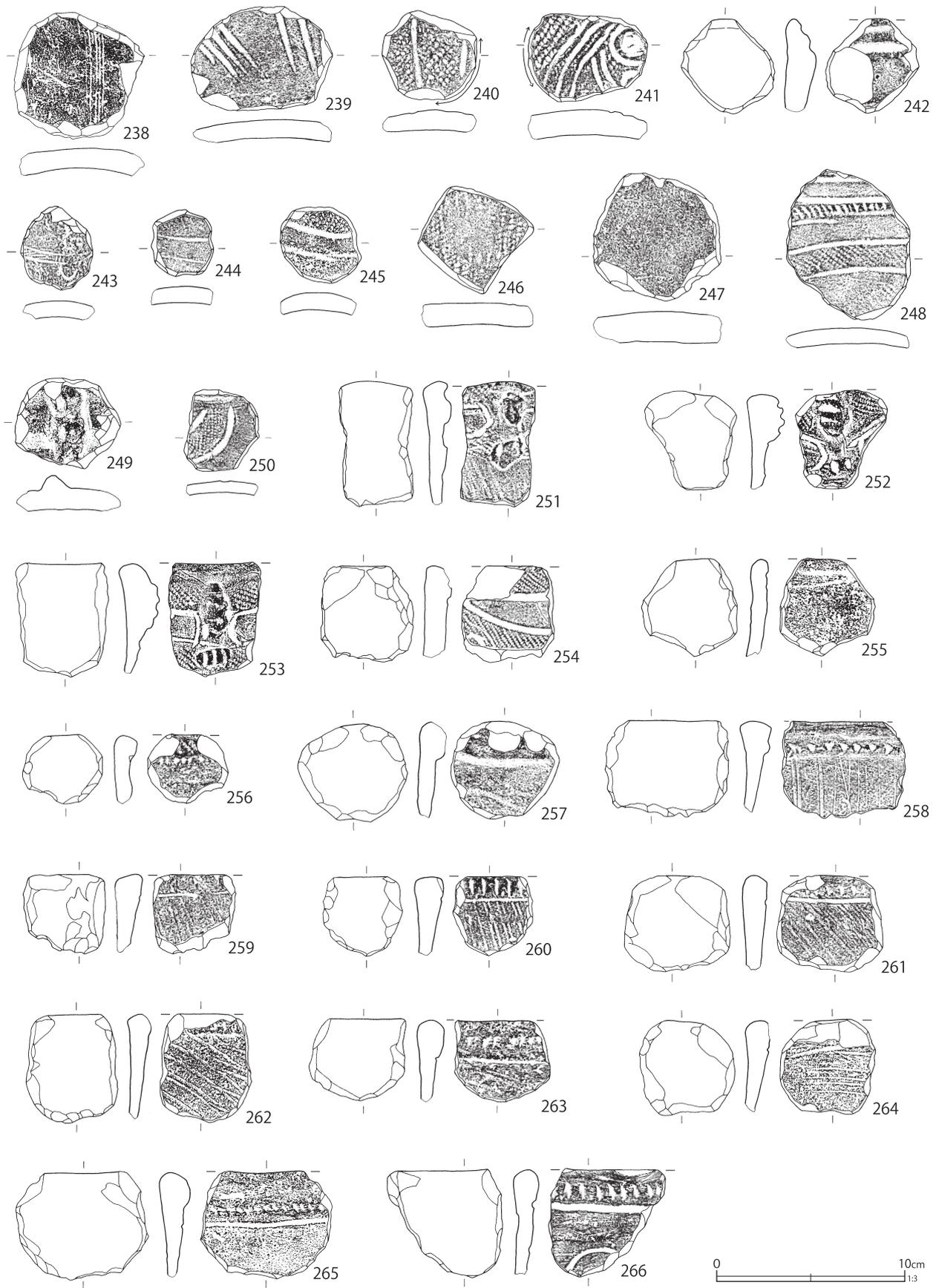
Ⅱ類の素材は、有文胴部（238～241・243～250・267）と無文胴部（268～271）がある。またⅠ類では、波状口縁（251・252）や平口縁（253～256）の精製土器のほか、紐線文・条線文系土器（258～266）がある。時期は238～243・245・246は後期前葉、248～265は後期後葉～晩期前葉、266は晩期中葉であろう。

252・254・256・257・259～262・264～266のⅠ類では、口縁端部の対向する位置に打欠があり、256・257・264の全体形状は円形に近い。273は口縁部を除いた破断面が顕著に摩耗する。274は内面と外面の一部が摩耗する。焼成や原体等から後期中葉頃の粗製土器であろう。

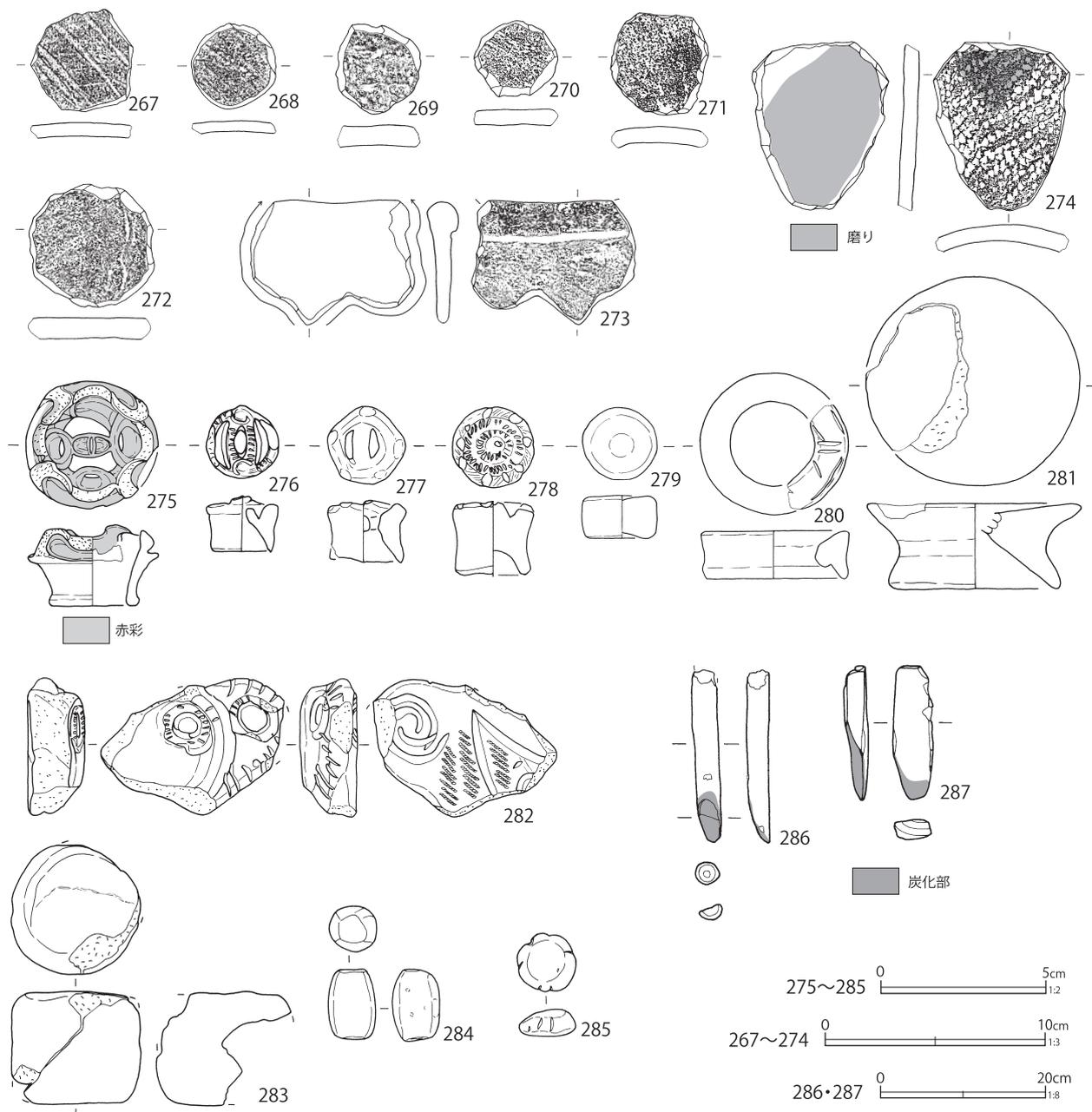
土製品 第120図275～281は耳飾り、282は土偶、283～285はその他の土製品である。

275～277・280は有孔、その他は無孔である。275は透かし彫りで赤彩がある。外周はひだ状の装飾にごく小さな列点を充填する。中央は上部を除く三方に環状の装飾を施す。列点と赤彩の位置は意図的に分けている。276は上下2対の瘤状突起を起点に、二本のブリッジが括弧状に向かい合う。277は中央にブリッジを持つ。外周に5か所の瘤を持ち、正面観は五角形気味となる。

278は裏側を大きく抉られた無孔タイプの耳飾りで、表面は外周が高く、中央部は突起状に盛り上がる。外周は一定間隔に工具を浅く押し付けて瘤状にしている。中心には貫通しない穴が開き、放射状の刻み目を中央の突起部、その外側の低所、外周の凸部（微隆起部）の三重に施す。開削部土器集積層出土耳飾り（第101図58）に似る。279は無孔、断面柱状の耳飾りで、表裏は凹レンズ状にわずかに窪む。280は環状（厚型）タイプの耳飾りの破片で、断面は三角形だが、裏側が鉤状になっている。正面は放射方向と円周方向に二本の沈線を描出する。281は側面観が白型となる耳飾りの破片で、無孔の可能性が高い。裏面は



第119図 水場遺構出土遺物 (11)



第120図 水場遺構出土遺物 (12)

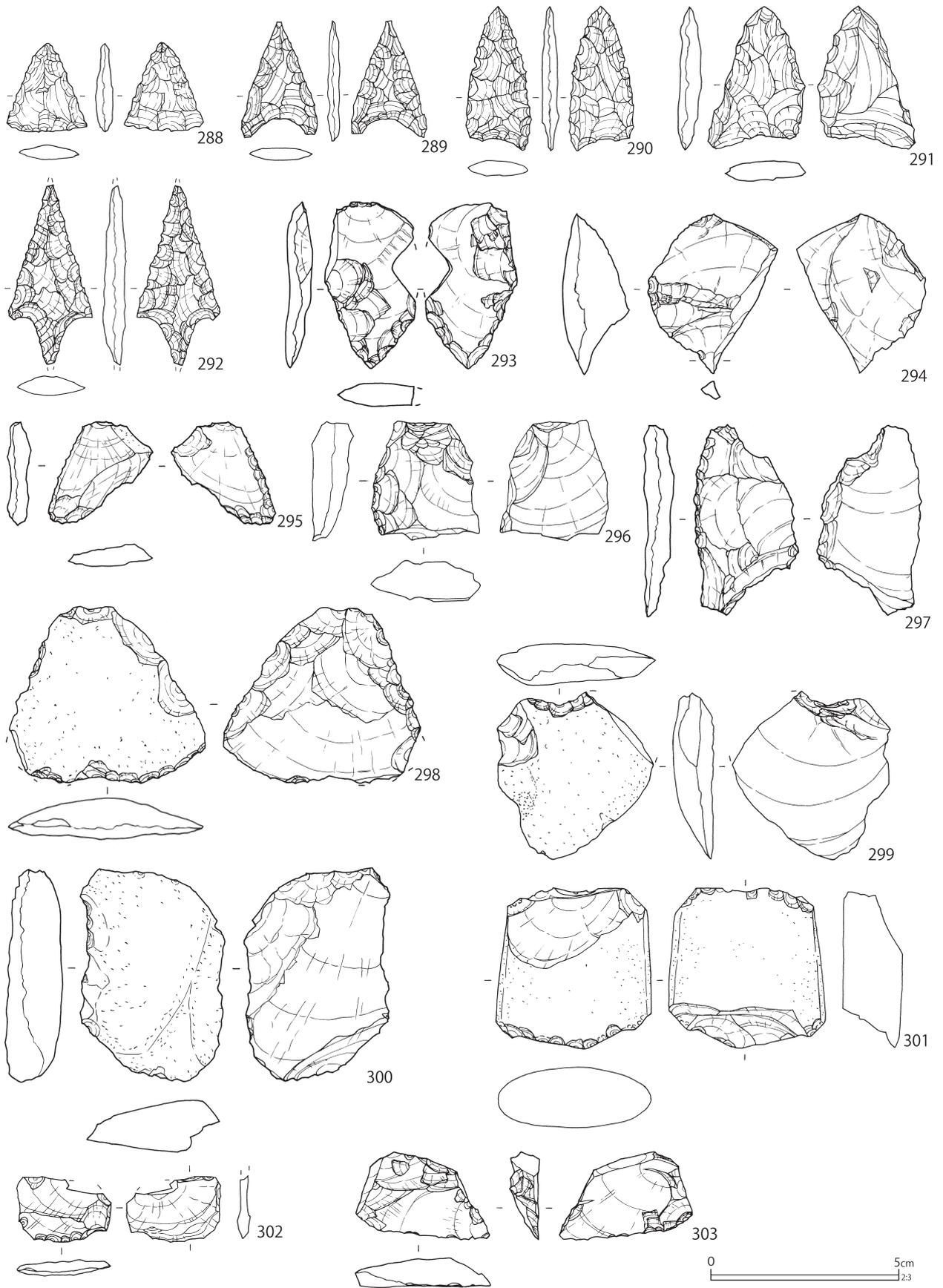
中央へ向かって大きく抉られ、表面も浅く窪んでいる。

282はみみずく形土偶の頭部破片である。有刻の円形隆帯で顔の輪郭および目と耳飾りを表現する。耳の正面から側面には等間隔に刻みを入れ、裏面は沈線による渦巻文を描く。地文はLR縄文である。目や耳飾りの表現は、開削部出土の第98図2の深鉢と類似する。晩期前葉であろうか。283は柱状の土製品で、開削部出土の第101図58とは胎土、焼成、作りが共通する。同一製作者によ

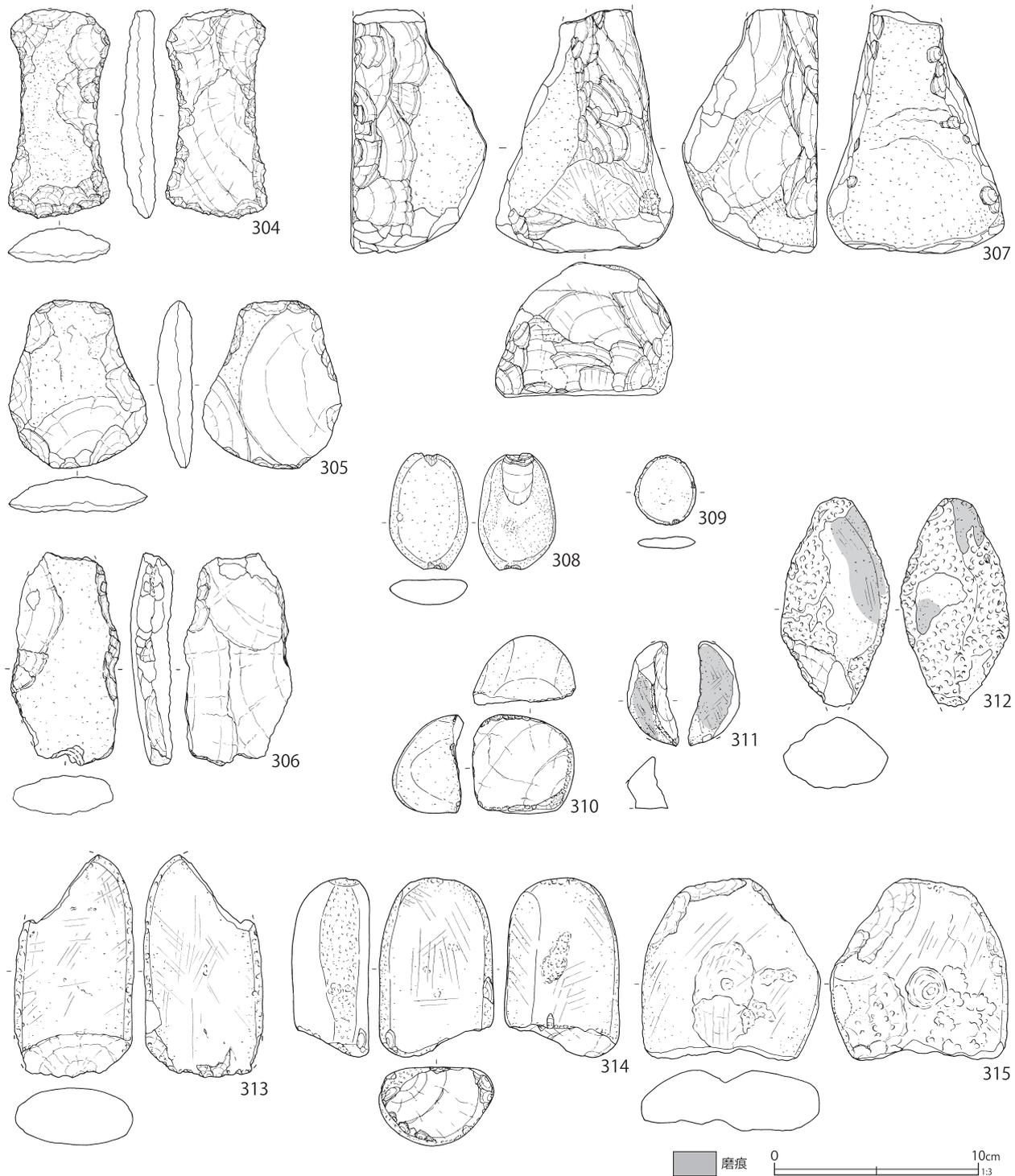
るものと推測される。284は小型俵形の土製品で、両端部は平坦で、側面はエンタシス風である。285はボタン状の土製品で側面に刻みが入る。底面は平坦に作り出し、剥がれた形跡はない。

286・287は木組遺構や木道状遺構以外出土の木質遺物で、286は丸木材、287は分割材で、286は先端部をきれいに磨いた端部加工A類である。

石器・石製品 第121～124図に示した。288～292は石鏃で、288は無茎平基、289～291は無茎凹基、292は有茎鏃である。



第121図 水場遺構出土遺物 (13)



第122図 水場遺構出土遺物 (14)

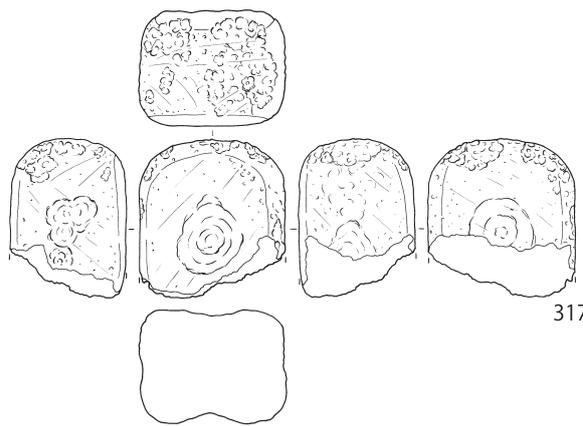
293・294は石錐とした。293は縦長剥片の二側縁に両面加工があり、尖頭形を目指している。石鏃未製品の可能性もある。294は素材剥片獲得時の鋭利箇所を錐部としている。微細な加工がある。

295～302はスクレイパーとした。301が磨製石斧の転用品で、それ以外は剥離性に富むチャート

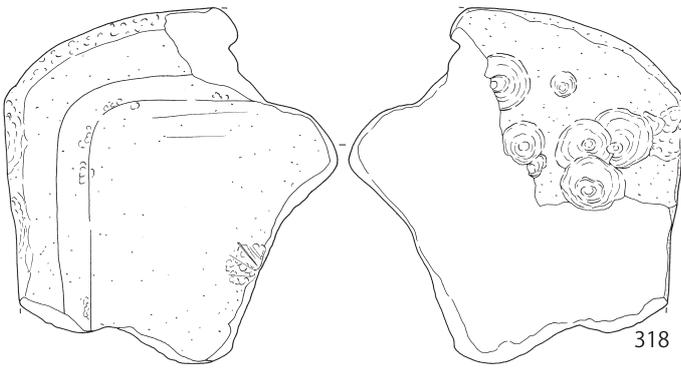
などの石材である。素材剥片の形状と加工状況は、295は横長剥片の隣り合う二側縁へ連続的な両面加工、296は矩形剥片の一側縁に片側加工、297は縦長剥片の二側縁に片面加工、298は矩形剥片の全側縁に両面加工、299は矩形剥片の一側縁に片面加工、300は縦長剥片の一側縁に片面加工、



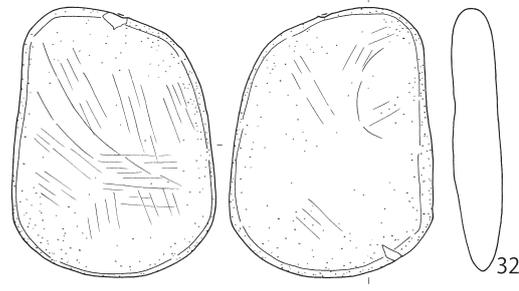
316



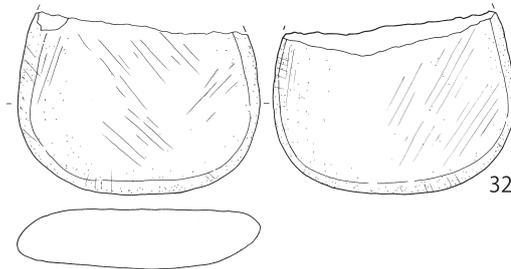
317



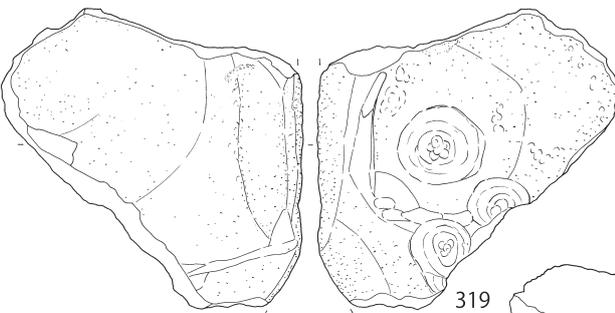
318



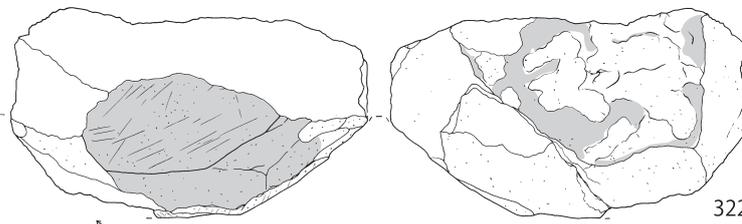
320



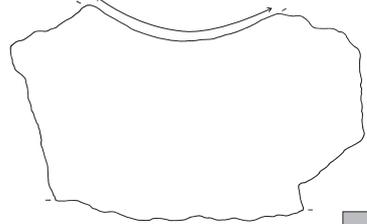
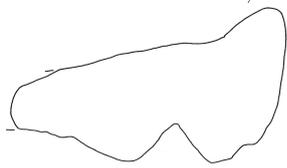
321



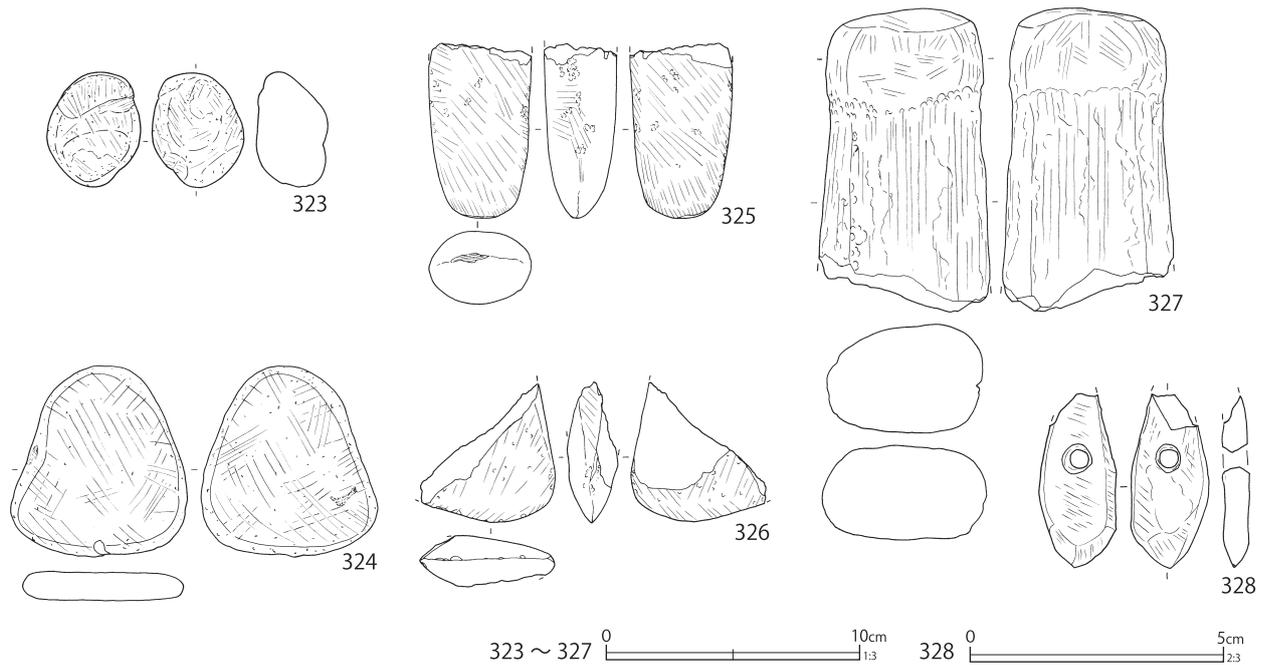
319



322



第123図 水場遺構出土遺物 (15)



第124図 水場遺構出土遺物 (16)

301は二側縁に片面加工、302は横長剥片の隣り合う二側縁に片面加工を施す。

303は微細剥離剥片で横長剥片の一側縁に刃こぼれ状の微細な剥離が連続する。

第122図304・305は打製石斧で、304は短冊形と分銅形の中間的な形状、305は基部側の短い撥形見られ、基部側端部に加工を施す。306は石皿転用の二次加工剥片とした。破断面にはわずかに凹穴が残る。

307は礫器としたが類例もなく不明瞭である。かなり厚みのある柱状礫の側面や端部を剥離し、平面形は撥形、断面形は三角形状に整えている。

308は打欠石錘、309～311は敲石とした。309は端部から側縁にかけて敲打痕状の荒れが見られるが、一般的な敲石と同類に扱える資料ではない。310・311は破損部の縁辺に、敲打に伴う潰れがある。311は磨石の破片を再利用したもので、形成された磨痕は転用以前のもので、敲打痕との共存ではない。

312～第123図317は同一資料内に磨痕、敲打痕、凹痕の3種の痕跡が混在する、複合機能の石器である。312・313は磨痕と敲打痕、314～317は

そのすべてが混在する（ただし314の凹痕は凹穴までは発達しない）。このうち316・317は各面が平坦な方形状に整形している。

318・319は有縁石皿で後者は有脚と見られる。ともに表面は磨面が発達し、裏面に多数の凹穴が開く。縁の断面形は前者が台形、後者は三角形である。

320・321・324は小型の扁平礫素材で、表裏の両面に磨面が発達する。台石としたが砥石との区別は明瞭でない。

322は安山岩製の石皿の破片で、機能面は凹面となり、掻き出し部側にも磨面が発達する。裏面は丁寧な整形はなく粗割の凹凸そのまま、接地面の凸部が擦れている。

第124図323は多面体状の小型礫で、各面に擦痕を伴う磨面を形成する。砥石とした。

325・326は磨製石斧で、325はかつての基部側に刃部を作り直したようで、刃部は鈍角である。

327は有頭石棒で、頭部の抉りは顕著ではない。断面形は楕円形で被熱している。

328は涙滴形の垂飾で、上部は欠損する。両面穿孔である。

(8) 包含層とその他の遺物

斜面包含層の概要 第5～7次調査区は、遺跡範囲の北側に位置し、第3・4次調査区から続く台地の縁辺(斜面)が発見された。斜面一帯には包含層が形成され、出土土器の様相は水場遺構(東の谷)を境に異なり、調査時から斜面東側と西側の土地利用の差が想定されていた。

本書ではこの斜面包含層のうち、水場遺構の東側を「東斜面」、同西側を「西斜面」とし、それぞれの出土遺物を報告する。特に谷の東側では、南から延びてくる台地の続きと、その縁辺である斜面地が存在したが、調査時はその様相差を把握するため、両者を分けて(傾斜の変換点となる標高9.5mライン付近を境に「東斜面」と「台地縄文層」)捉えていた。しかし、整理作業の結果、台地と斜面とで大きな様相差は無く、両地点での接合事例が散見された。よって、一つの大きな包含層と捉え直し、「西斜面」と対になる「東斜面」として報告する。なお、斜面包含層以外の出土遺物(古墳時代以降の遺構、地点不明、攪乱、表採等)を「遺構外出土遺物」として本項の最後に一括した。

出土遺物の様相 第125～127図は出土土器の重量分布図で、包含層出土遺物を①全体、②早期、③前期～中期中葉、④加曾利E～称名寺、⑤堀之内1、⑥堀之内2、⑦加曾利B、⑧曾谷・高井東、⑨安行1～3b、⑩紐線・条線文、⑪安行3c・d、⑫底部I類、⑬底部II類、⑭その他に分類、集計して示した。概要と特記事項を述べる。

②**早期** 出土土器の多くは条痕文期で、東斜面を中心に全体に分布する。最も古い資料に早期前半夏島式の底部(第164図73)が1点出土したほか、草創期の可能性のある尖頭器(第196図722)や珪質頁岩製のスクレイパー類(第151図597・599)が出土している。

③**前期～中期中葉** 分布図上に大きな変化はないが、各時期の遺物量は早期より僅少である。花積

下層式、関山式はほとんど出土せず、黒浜式～諸磯b式も数片が出土するに過ぎない。前期後葉諸磯c式は、貼付文系と結節浮線文系があり、F-24グリッドでややまとまって出土する。また少量ながら興津式も出土している。前期末葉の土器はほとんど出土しなかった。中期では五領ヶ台式が東斜面側で20片程度出土した。中期前～中葉期は、阿玉台Ib・II・IV式、貉沢式、新道、藤内式の各時期が10～20点ずつ出土している。

④**加曾利E～称名寺式** 遺物量が微増し、大型の破片も出土する。条痕文期以降、集落形成が途絶えるが、再び遺構が形成される現象(第706号土壙)と一致、連動するものと思われる。

⑤⑥**堀之内1・2式** 両斜面で多量に出土し、包含層形成のひとつのピーク期である。東の谷では西斜面寄りに第5号木組遺構が構築された。重量では西斜面がやや多いが、両斜面が隔てなく包含層を形成する点は、以降の動向との対比において重要である。東斜面では、台地よりも斜面での重量が多く、「斜面捨て場」と評価できる。

⑦**加曾利B式**～⑧**曾谷・高井東式** 前時期からの出土量の減少と西斜面への分布の集中という二点において、当遺跡におけるひとつの画期と言える。特に東斜面側では以降の包含層形成はなく、土地利用差の現れた時期と評価できる。遺跡西側の第2次調査では加曾利B式の住居や土壙を伴う盛土遺構を形成することから、斜面捨て場から盛土行為へと読み解くことも可能である。

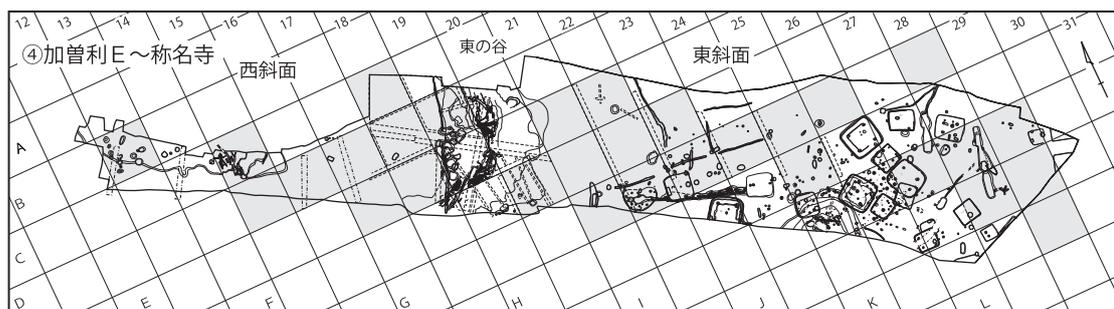
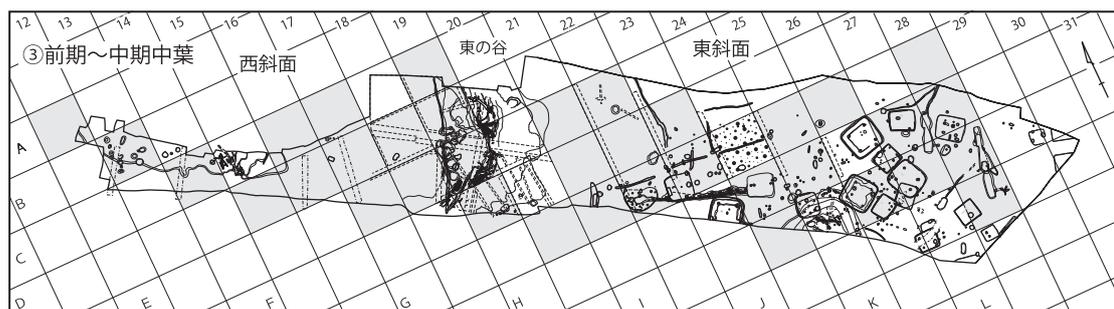
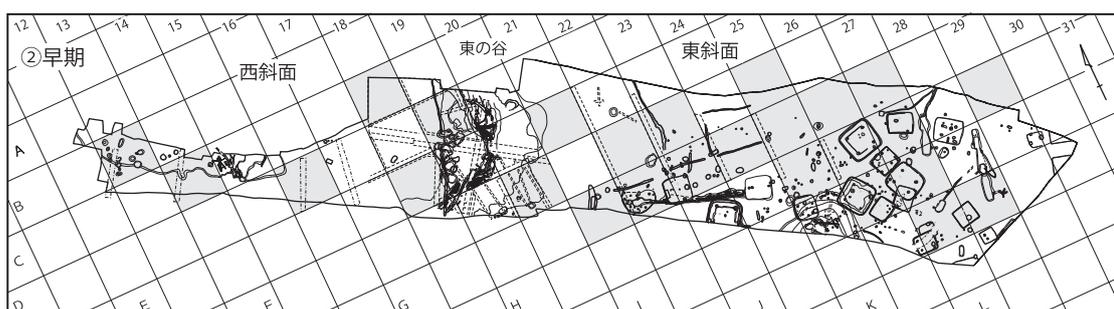
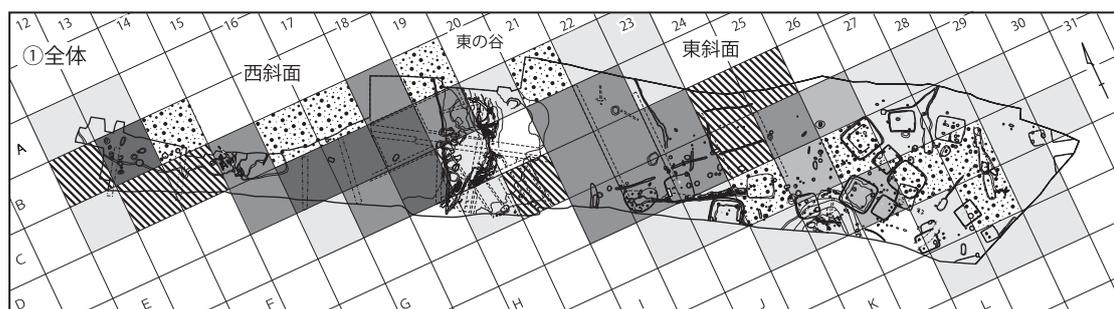
⑨**安行1～3b式**+⑩**紐線・条線文** 前時期に続き廃棄行為は、ほぼ西斜面に限定されている。異なる時期での単純な重量比較は意味をなさないが、それを考慮しても、包含層の形成は顕著である。東の谷に近いD-17・18グリッド付近とC・B-13グリッド付近の両翼に分布の集中があり、前者の集中度合いは著しい(図版47-7・8等)。遺跡西側では祭祀遺物集中地点や土器集中地点の形成が始まる時期である。

⑪安行 3c・d式 全体的な遺物量が急減し、水場遺構付近の一角を除き積極的な意味での包含層の形成は無かったようである。

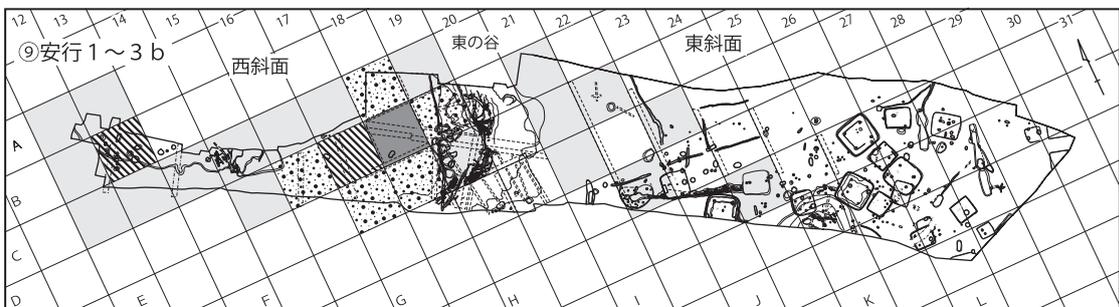
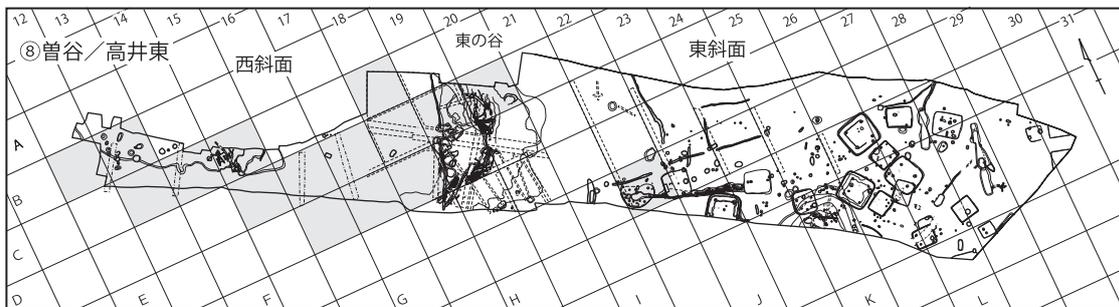
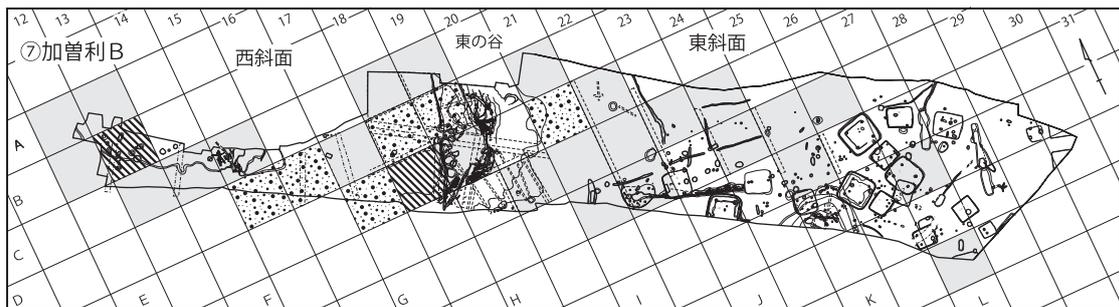
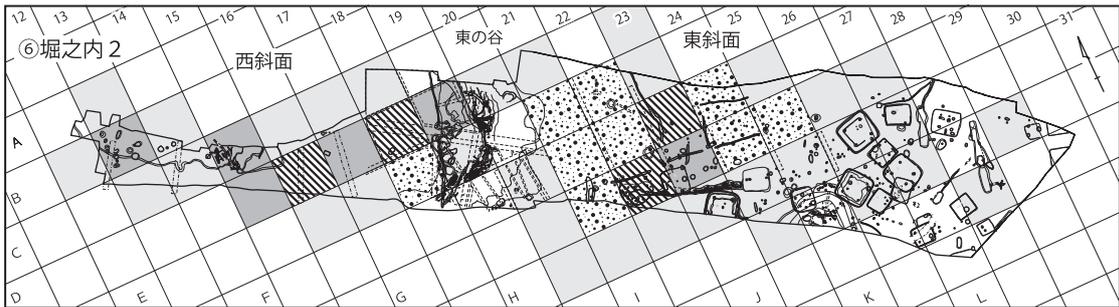
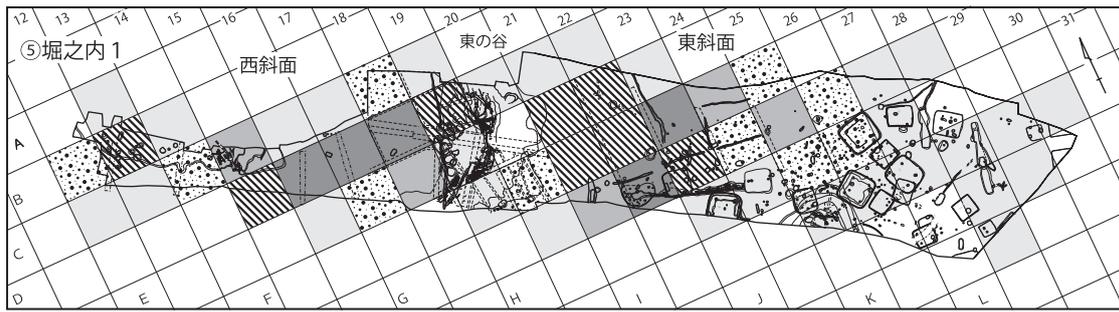
安行 3b～3c式は、東の谷の流路底面に様々な木組施設を構築する時期で、流路内では遺物が多く出土する。なお、遺構外で少量出土した晩期末葉は、図に反映されていないが、浮線文系土器は第5号方形周溝墓の盛土下で出土した。

⑫底部Ⅰ類+⑬底部Ⅱ類 垂直気味に立ち上がる底部Ⅰ類（後期中葉以前）と、底径が小さく開いて立ち上がる底部Ⅱ類（後期後葉以降）に分類した。底部Ⅰ類は⑤・⑥期、底部Ⅱ類は⑨・⑩期の重量分布図と概ね一致している。

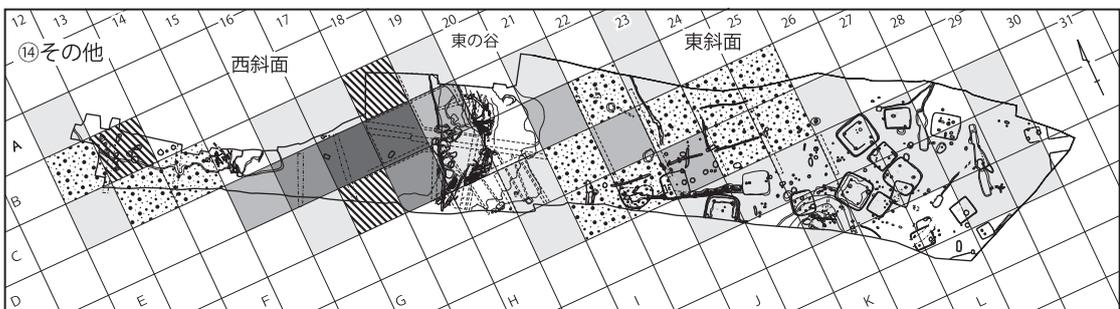
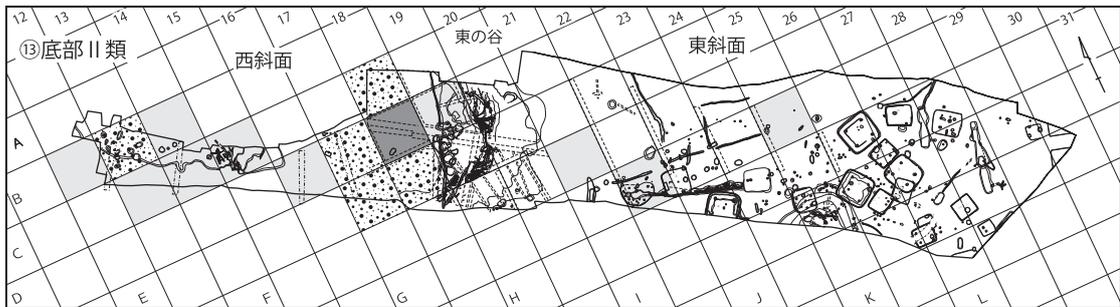
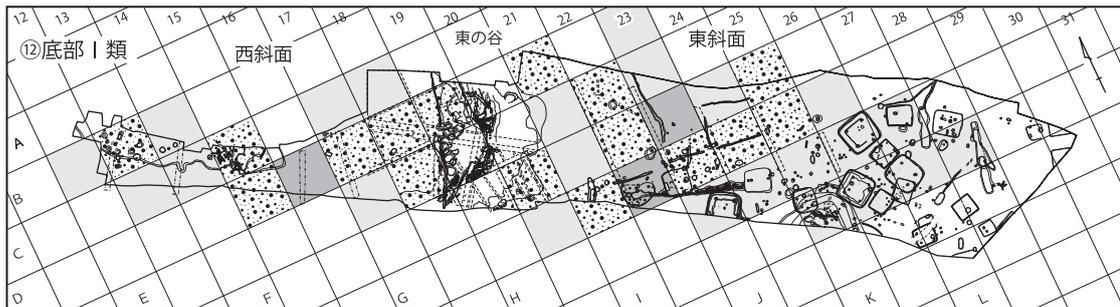
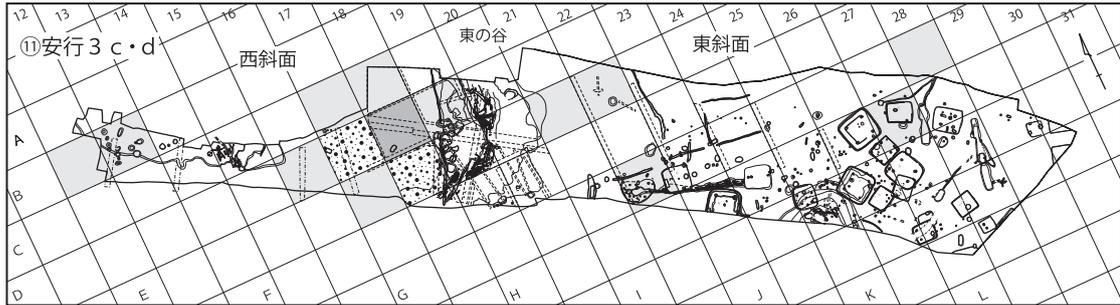
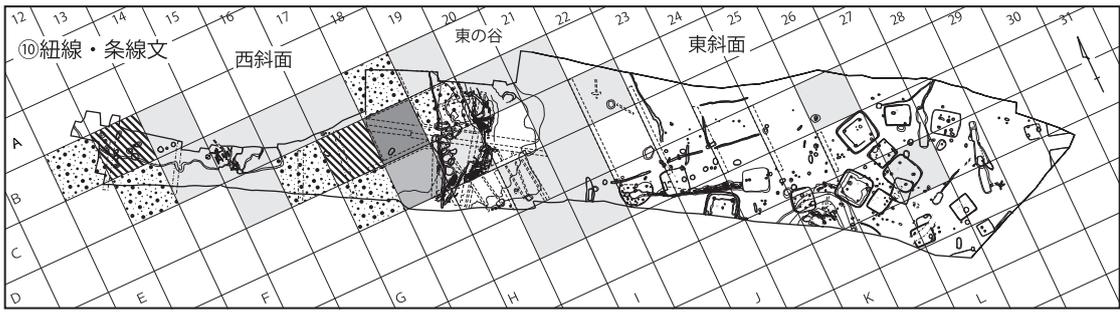
⑭その他 地文のみや無文部、摩耗のため判別できないもの、複数時期にまたがる可能性があり②～⑬に入れられなかったものを一括する。



第125図 土器重量分布図（1）



第126図 土器重量分布図 (2)



第127図 土器重量分布図 (3)

東斜面出土遺物（第128・131～155図）

土器 第131～155図が出土土器で、第131・132図が復元実測した土器、その他は破片である。

第131図1は称名寺式2式終末の深鉢で、口縁部から底部付近まで残存する。縄文も列点も伴わず、沈線のみでスペード文やJ字状モチーフを描く。下部は閉じず、懸垂文風に開放している。

2は胴部が強く屈曲する称名寺式2式の小型の深鉢で、括れ部付近に渦巻文を描く。

3・4は頸部が括れ、無文の口縁部がく字状に外反する堀之内式の平口縁深鉢で、口縁部には小突起を持つ。3は口縁端部に沈線が巡る堀之内1式で、渦巻状モチーフを持つ捻りのある耳状突起を持つ。頸部は二条の押圧隆帯で区画し、8字状貼付文でこれを連結する。また、口縁部突起から頸部区画までを、同種の押圧隆帯で繋げている。

4も平口縁深鉢だが、捻りのある突起を持つ。突起には円窓が開く。口端部は内屈し、外面には指頭押圧状の浅い円形の窪みが連続する。鎖状の押圧隆帯で括れた頸部を区画し、中心には8字状貼付文を持つ。欠落しており不明瞭だが、中心で交差した押圧隆帯で、前述3のように口縁部から頸部区画までを繋げるのだろう。

5は地文のみの平口縁深鉢で、山の低い小波状部がある。口端部には沈線が巡り、小波状部は押圧を加え二山の突起状となる。

第132図6は口縁部が外反し、端部が内屈する堀之内式の深鉢で、地文は無く、二本の並行沈線で懸垂文、蛇行懸垂文を描出する。

7は胴部の括れる器形で、地文は無く、単沈線で懸垂文ないしは斜線文を描出する。6・7はともに器壁が厚く大型の土器である。

8は堀之内1式の浅鉢で、4単位波状口縁の波頂部にはラッパ状の突起を付ける。突起上面には、始点終点に円形刺突を持つC字状文を持つ。幅狭な口縁部はくの字に強く屈曲し、上端部には楕円形区画内に刺突を施す。刺突は竹管状工具を

外側から当てた結果、蹄状となる。

9～11は堀之内2式の深鉢で、9は小波状、10は平口縁、11は波状口縁である。9は口縁部に刻み隆帯が巡る。波頂部は欠落するが、直下に幅広の縄文帯を垂下させ、これを基点に対峙する三角形文を描く。

10は口縁部の二段の刻み隆帯を8字状貼付文で連結している。文様は横位の縄文帯内に、垂線や蛇行状の曲線文を描く。

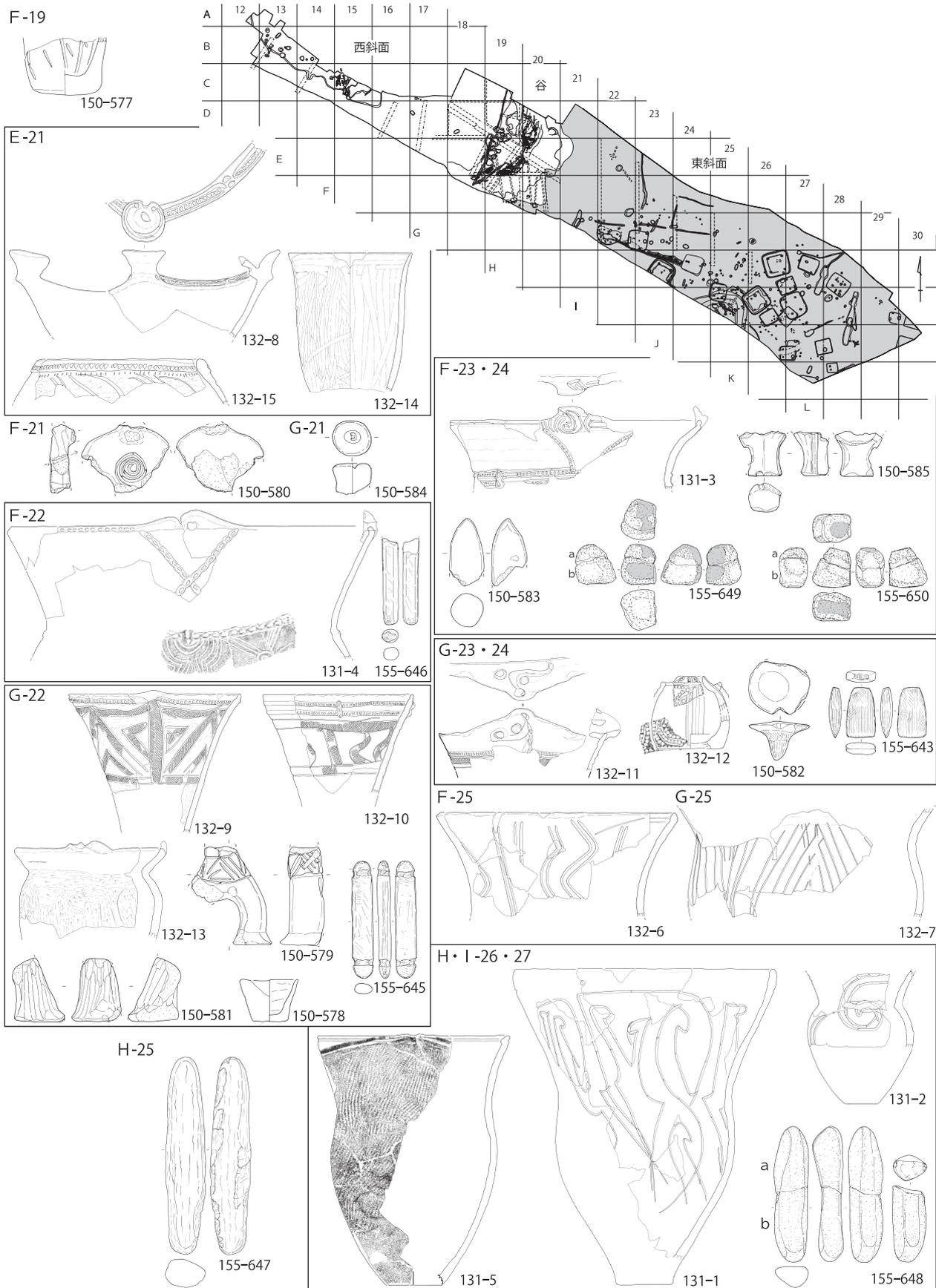
11は波頂部に3個の円窓と鱗状の突起、口縁部の刻み隆帯に延びる押圧隆帯等の装飾を持つ。また、内面にも波頂部の円窓からS字状に蛇行する鱗状の段差を、口縁部内面の段差に繋げている。

12は推定器高7.5cm程度の小型の壺で、口縁部と底部の二片のみ出土した。寸詰まりの徳利状に、胴部下半が張り、口縁部に向かって窄まる。口縁部には浅く刻みの入る微隆起帯が巡り、紐通し状の橋状部から垂直方向に同様の微隆起帯二本が胴部を垂下する。器面の全面に竹管状工具による円形刺突を充填する。類例は無いが、竹管状工具の使用や、微隆起帯が当該時期の壺や注口土器を彷彿とさせることから、後期初頭から前葉頃の所産と見たい。

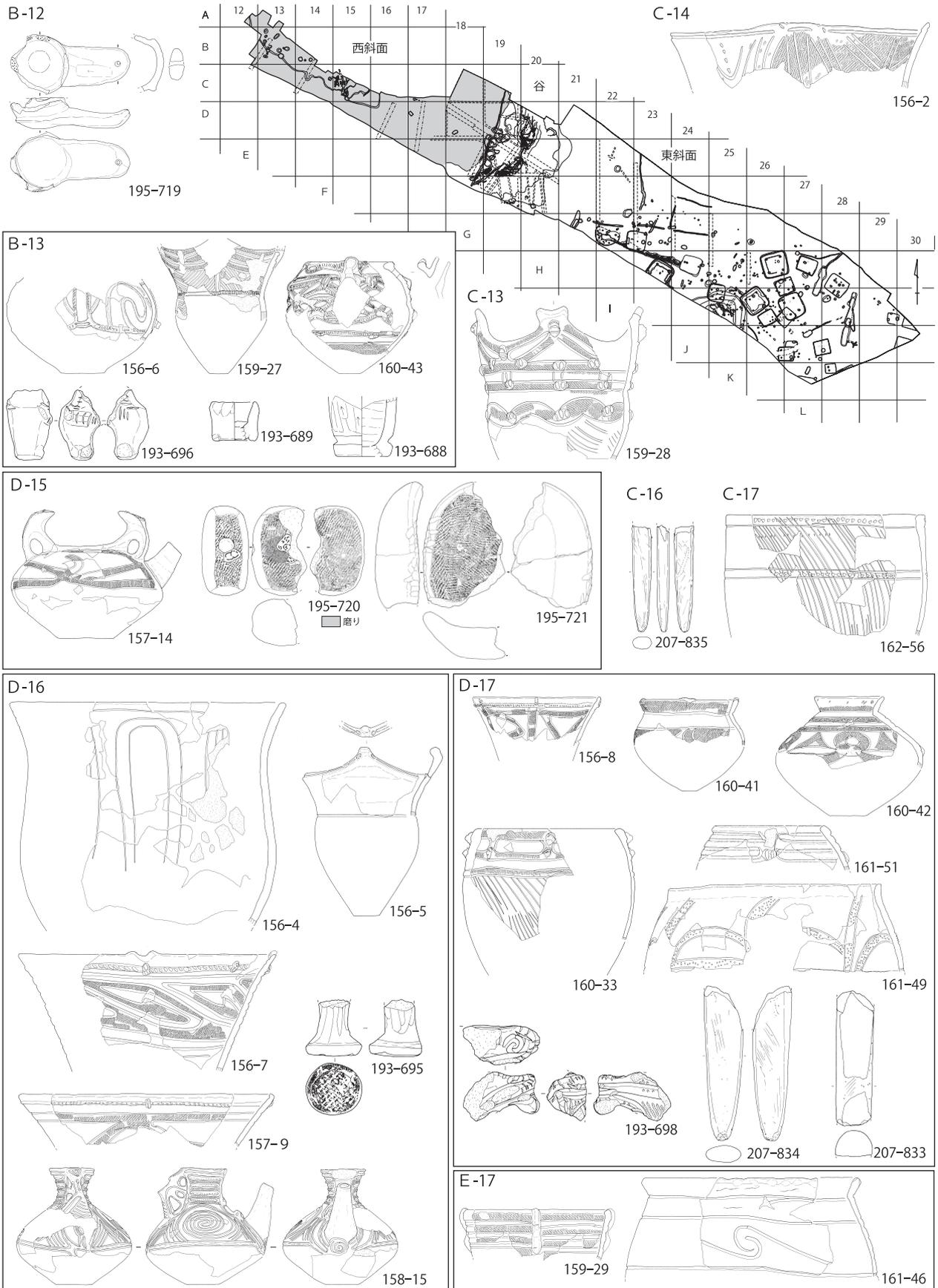
13は頸部が強く括れ、口縁部の外反する平口縁深鉢で、口縁部には捻りを加えた突起を配す。器面調整はケズリ後部分的なミガキで、胴部には貧弱な沈線により構成不明な懸垂文状の文様が残る。突起などからすれば堀之内1式だろう。

14は無文の平口縁深鉢で、口縁部はわずかに外反する。口縁部は内外面ともに横方向のナデ、胴部は外面は縦方向のミガキ、内面はナデである。型式的特徴に乏しく時期は判然としない。

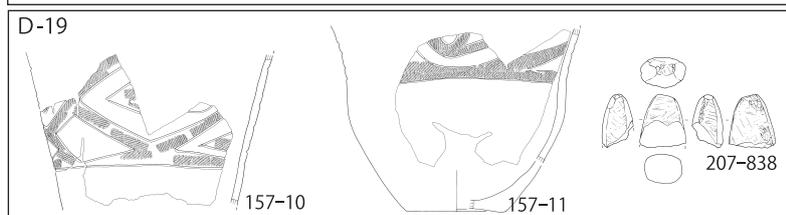
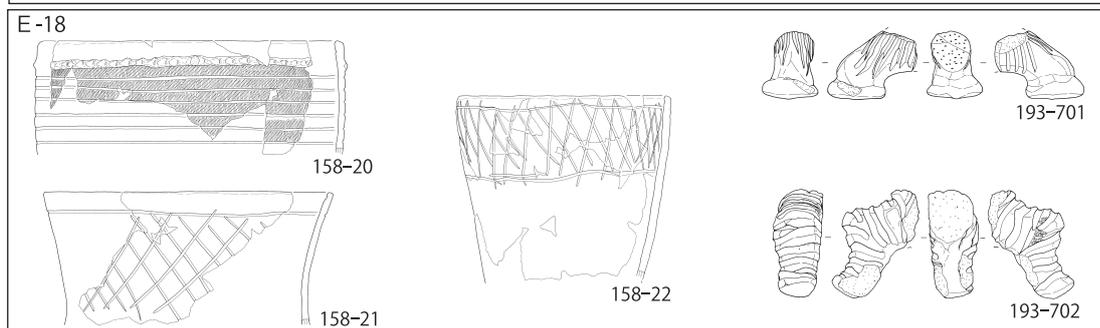
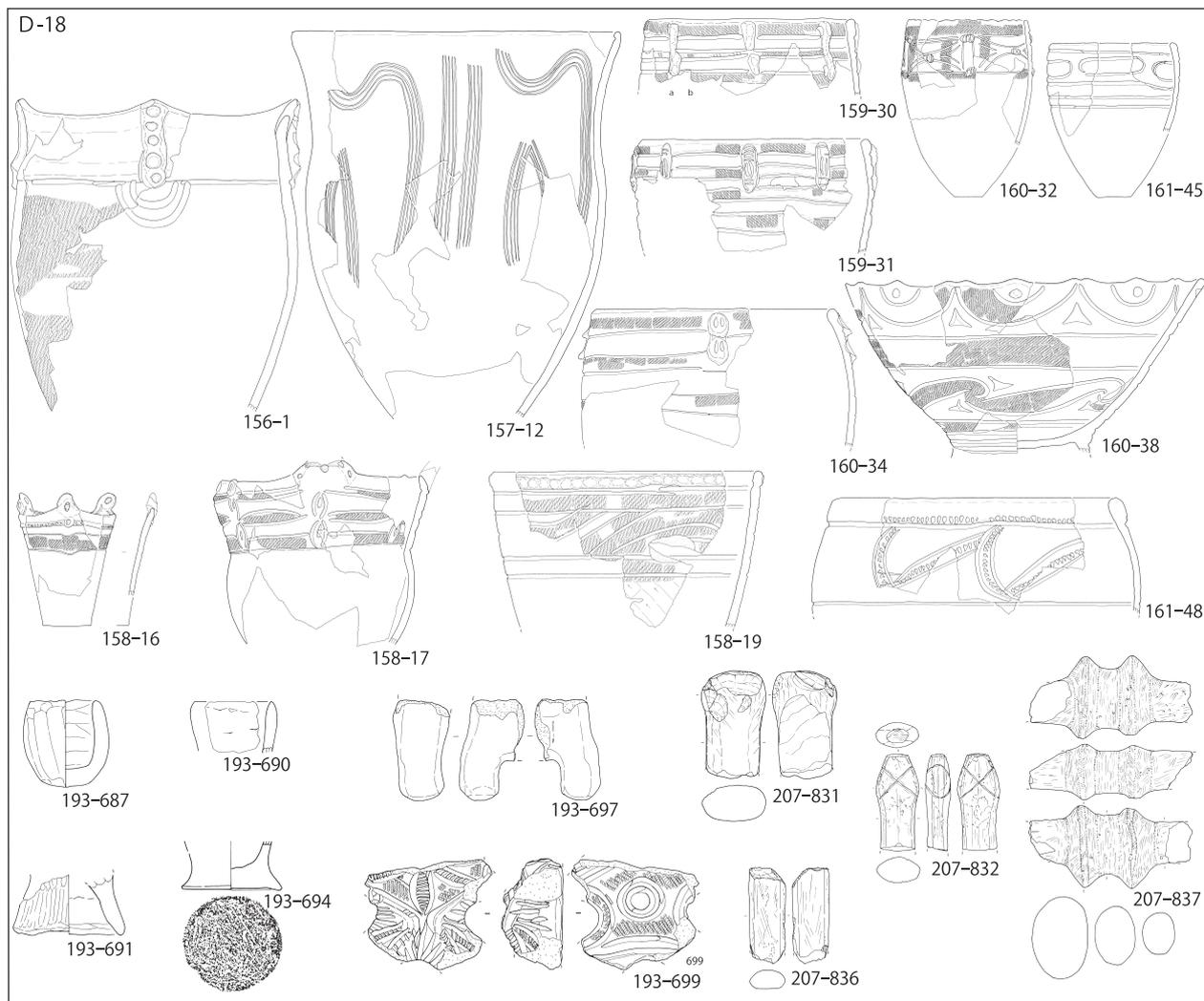
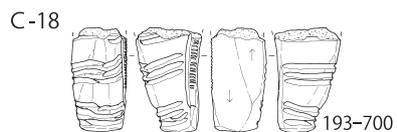
15は紐線文土器で、条線がなく、調整はケズリである。口縁部は内湾し、口端部は有段で沈線区画は無く、列点が巡る。段の下には列点施文時の工具痕が残る。胴部に斜線文ないしは弧線文を描く。晩期前葉であろう。



第128図 東斜面の主な出土遺物



第129図 西斜面の主な出土遺物（1）



第130図 西斜面の主な出土遺物（2）

第133図16・17は早期後葉の野島式で、16の口端部には押圧を加え細かい波状となっている。ともに沈線のみで文様を描出する。

18～23は茅山下層式で、21～23は隆帯上に細い刻みを持ち、21は縦位に区画する隆帯との交点に円文を配す。

24・25は繊維を多量に含む下沼部式である。24は口縁部が肥厚し、縦位の短い微隆起帯を配し、貝殻腹縁を刺突する。25は絡条体圧痕文を施文する。26～30の口端部には刻みを加え、32～40にはこれが無い。31の調整は擦痕状で、34・35・43はほとんど調整が見えない。26～31・34・35は野島式、他は茅山下層・茅山上層式の可能性が高い。

49・50は繊維土器の底部である。

第134図51～53は繊維を含む前期中葉黒浜式で、54・55は繊維をわずかに含む黒浜式～諸磯a式である。51は口端部を平坦に作出し、平行沈線で文様を描出する。54・55は節の細かい0段多条のLR縄文である。

56は前期後葉諸磯b3式である。外反する口縁部がくの字に内折する。器面は全面に竹管状ないしは棒状工具で浅い横線を施し、部分的にRL縄文を施文する。

57～84は諸磯c式で、57～73・84は貼付文系、74～83は結節浮線文系の土器である。いずれも砂礫を多く含み、貼付文系でより顕著である。

57・58は口縁部が内湾して立ち上がり、中央を窪ませる円形貼付文を施す。57は大振りな耳状貼付文と組み合わせる。集合沈線は横方向である。58は口唇上に刻みを加え鋸歯状となる。貼付文はほとんど剥落するが、円形貼付文と棒状貼付文が組み合わせる。集合沈線は口縁部が斜方、頸部は横位である。61～63は同一個体で、口縁部を巻く貼付文と棒状貼付文を交互に配す。

74～76は同一個体である。器壁は薄く、口端部はやや先細り、直立して立ち上がる。浮線文は縦方向、横方向の両者があり、74では単独で、75・

76では縦方向の二列が組み合わさる。77では横方向の二列が縦方向の浮線文と連結する。82・83の胴部破片では、縦方向の浮線文が数本配されている。集合沈線の施文具は、幅10mm程度の櫛状工具で、口縁部は横方向に、この下位を斜方向（左右）に施文し、これより下位の胴部では、縦向きの斜方向に施文する。

85は結束羽状縄文が施文される。諸磯c式に伴うものであろうか。

86～94は前期後葉の興津式で、94以外は同一個体である。86～88はわずかに外反する口縁部で、口端部は平坦である。括れ部付近を竹管状工具の横位沈線で区画し、区画上位を、貝殻腹縁を縦位刺突列、角頭状工具の刺突列で施文し、下位も貝殻腹縁と思しき刺突を器面全面に充填する。

94の施文具は不明だが、興津式特有のロッキング施文である。

第135図95～105は中期初頭五領ヶ台式で、106～115までは阿玉台Ib式、116・117は隆帯脇の結節沈線文が複列化した阿玉台II式である。

118・119は三角押文を施文する新道式、120・121はキャタピラ文等を施文する藤内I式である。

123～128は胴部に横位や屈曲する低隆帯を施し、全面に縄文施文する阿玉台IV式で同一個体の可能性が高い。

129は勝坂式終末の井戸尻式であろう。

130～140は中期後葉加曾利EⅢ式キャリパー形土器で、渦巻状モチーフや磨消懸垂文を施文する。130・131は波状口縁になる。

第136図141～161は後期初頭称名寺式である。141～145は沈線区画内に縄文を充填する称名寺1式で、147～154は称名寺2式の口縁部で、153・154は区画内に列点を充填する。また、155～161は同時期の胴部で、156～158・160・161は沈線区画内に列点を充填する。146は波状口縁の波頂部にJ字状の隆帯を貼り付ける。

第136図162～第141図310は後期前葉堀之内1式

である。このうち第136図162～第139図253は地文に縄文を持ち、258～310は縄文を持たない深鉢である。

第136図162～第137図188は波状口縁ないしは小波状となる深鉢で、189～193は平口縁である。187・188を除く多くの口縁端部には沈線が巡り、179では二本沈線、193では三本沈線、181・182では沈線間に刻み目のある沈線が巡る。180では口端部沈線の脇に、さらに二本沈線が沿う。

波頂部は2～3個の円文を配すものが多く、168・175・183では円窓となる。168・172・183等、弧線や重弧線と組み合うものも多く、178は口縁部が無文で綱取式系のモチーフを施す。163・167・168・174～176等、波頂部の端部に窪みを持つものが多い。波頂部下の文様は、懸垂文や蛇行懸垂文、刻み隆帯（175・176）などを組み合わせる。174は沈線間に列点を充填している。164・165は竹管状工具による二本一組の平行沈線である。168の蛇行沈線は折り返しの幅が広い。184・185は同一個体である。また181・182も酷似する。189・190ではU字状・半弧状など単位文化している。

194～200・202～204は地文縄文上に沈線文様を持たないものを一括した。口縁端部は沈線のもの（194～196・204）、列点を施すもの（197・198）、そのいずれもないもの（199・200・202）がある。

205～208は地文を持つその他の土器である。205・207・208は括れた頸部に沈線区画を持ち、区端部に沈線が巡る。後二者は平口縁で、205は小波状ないしは突起を付すかもしれない。206は波頂部下に刻み隆帯が垂下する。

第138図209～213はわずかに縄文を施文した口縁部である。

214～第139図253は地文縄文地に沈線で文様を描く胴部破片である。沈線は太めの棒状工具のもの、二本一単位の平行沈線のもの（217・220・233・237・240～242・250等）がある。

文様は、231～234・245・251等は刻み隆帯を垂

下する。また、251・252は頸部に刻み隆帯が巡る。221は沈線間に縦方向の列点を充填する。223は沈線区画内を磨消、地文縄文上に櫛状工具による条線を施文する。

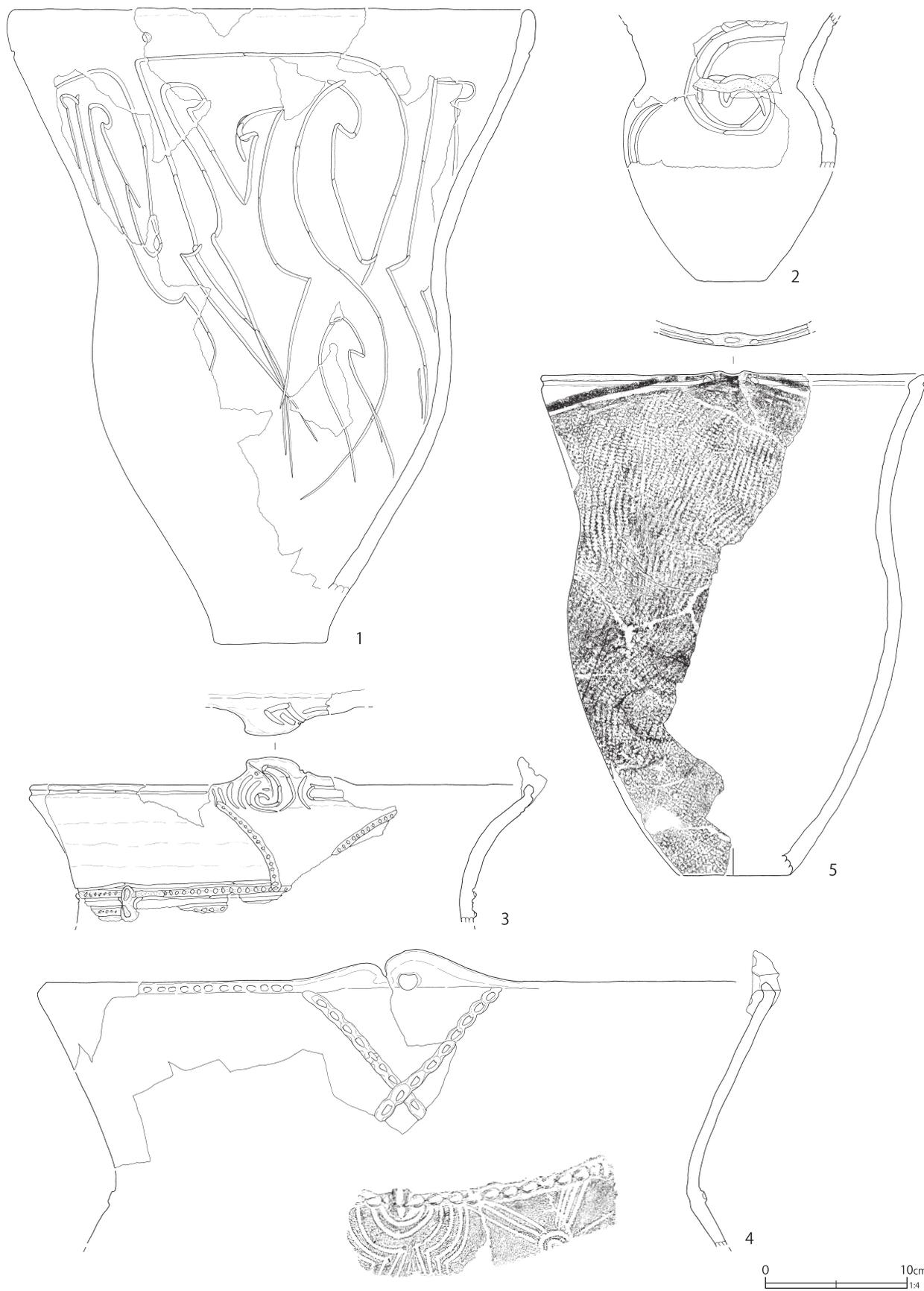
254～256は注口土器で、257は壺であろう。

258～第140図294は地文に縄文を持たない口縁部破片である。268・269・278以外は平口縁深鉢で、268・278には加飾する小突起を、また269は加飾しない瘤状の小突起を付す。266・276・283・290～294では口端部に沿った沈線が無いが、その他は沈線やそれに代わる区画がある。単沈線以外では二本の沈線（258・261・263・279・283）のほか、四本一単位の沈線（269～271）があり、櫛状工具の273もこの延長線上にあると理解される。また、260の口端部は単沈線状の凹線を作成後に、凹線内を二本一単位の工具で施文する等多様である。このほか264では沈線に沿った微隆起帯上に刻みを施す。また267は刻みと沈線を交互に二段ずつ配する。第3号木組遺構出土資料（第62図3）と同一個体である。

胴部の文様には太い沈線によるもの（258・263・272）、細い沈線のもの、二本一単位のもの、四本一単位のもの、櫛状工具によるもの等がある。

260・261は刃先が8～9に分かれた櫛状工具を用いる。264は口縁部の隆帯から、三～四本一単位の沈線で、対向弧線を描く。268は小突起に1対の円形刺突を持ち、対応する位置に二本の縦線が垂下し、二段の重圏文の心を貫く。第140図274のモチーフは、これの崩れたものだろうか。265・266・275は綾杉状のモチーフを描く。267は口縁部沈線区画より二列の刻列が垂下するが、同一個体の第3号木組遺構出土資料ではこの一方が沈線である。272は口縁部の沈線区画と接続する5重の弧線を描く。第112図59と同一個体である。

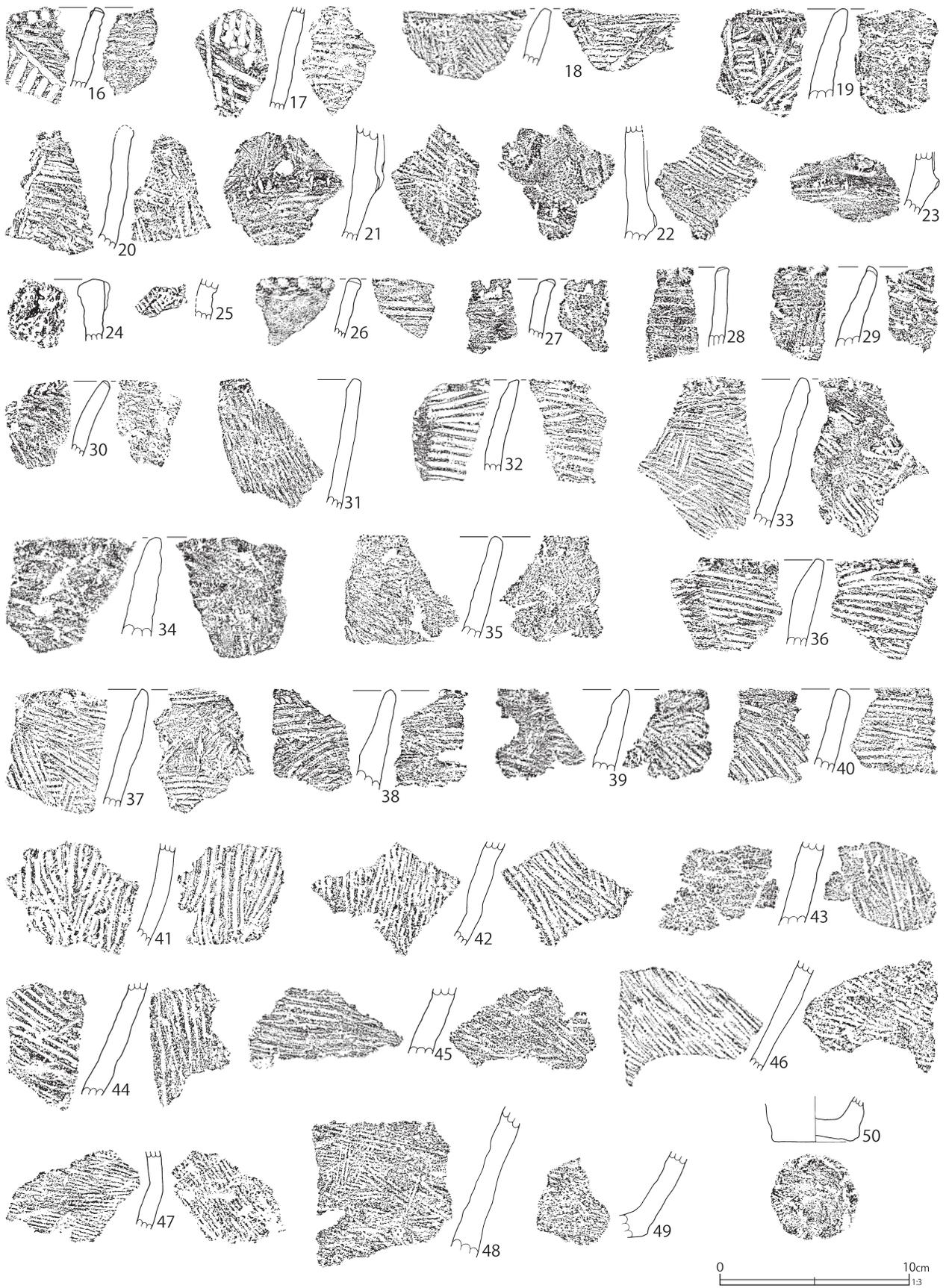
278・279は頸部が括れ、無文の口縁部が外反し、口端部が内屈する土器である。口縁部はともに小波状である。波上部は、278では円文を3つ



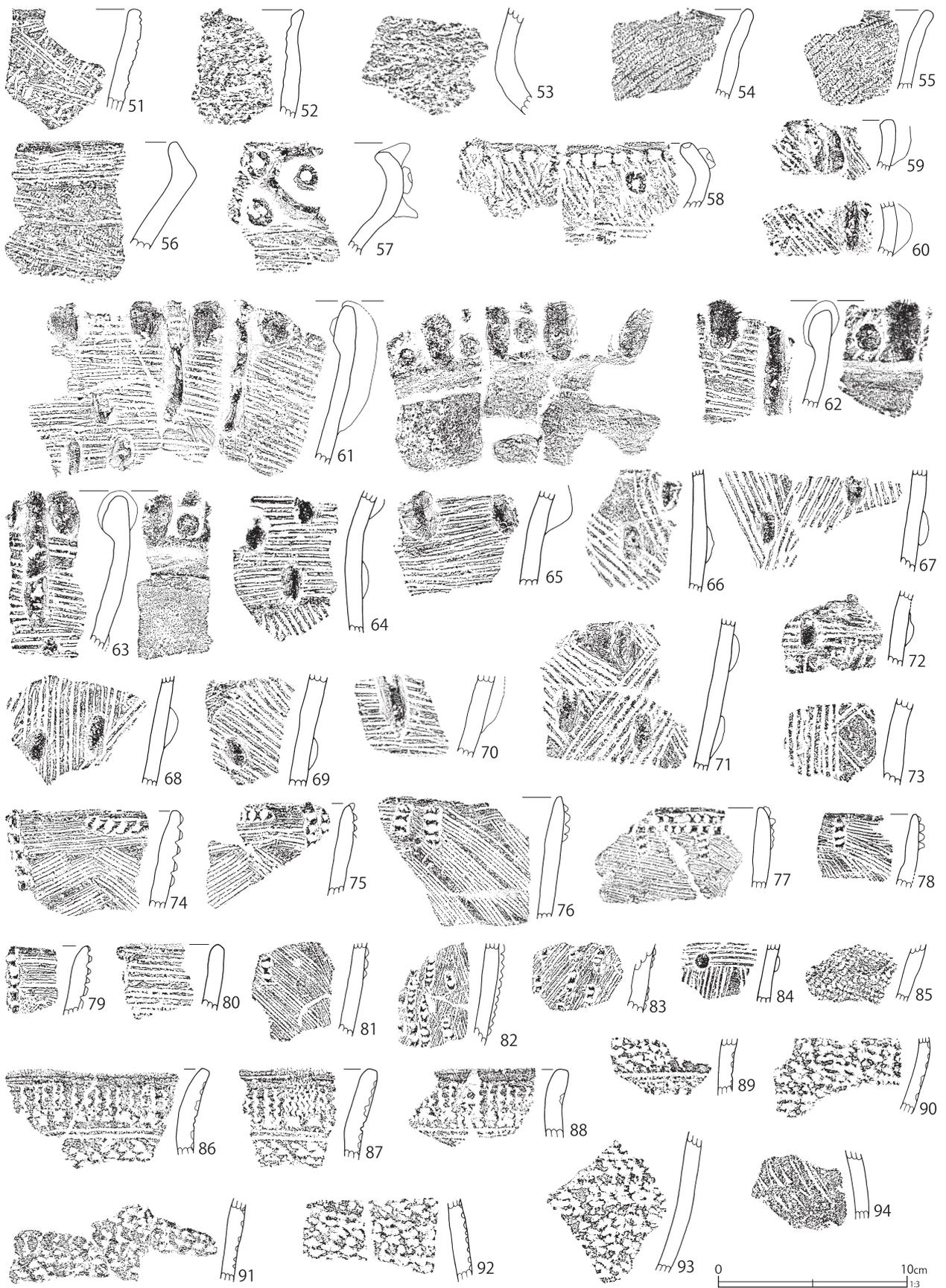
第131図 東斜面出土遺物（1）



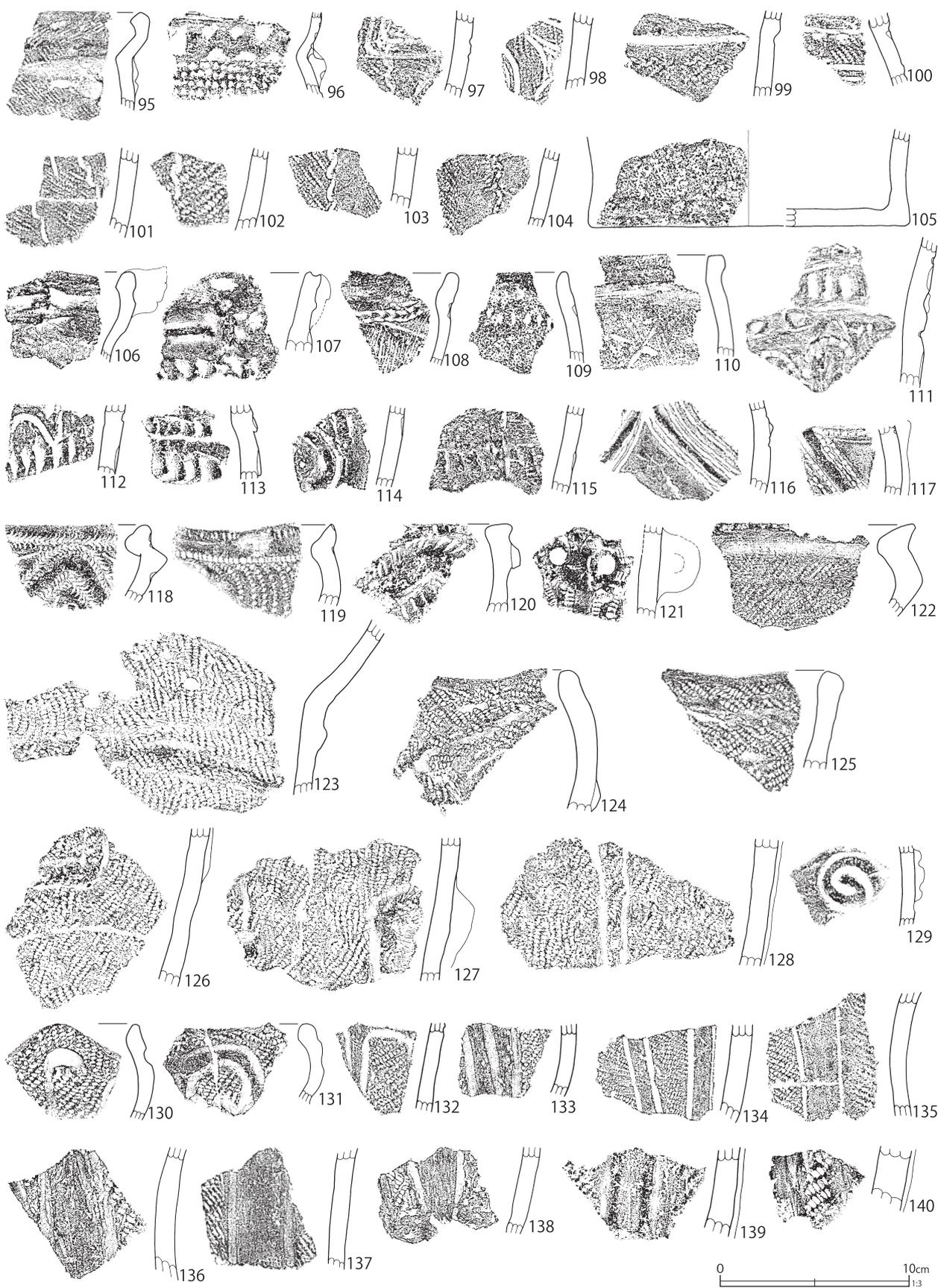
第132図 東斜面出土遺物 (2)



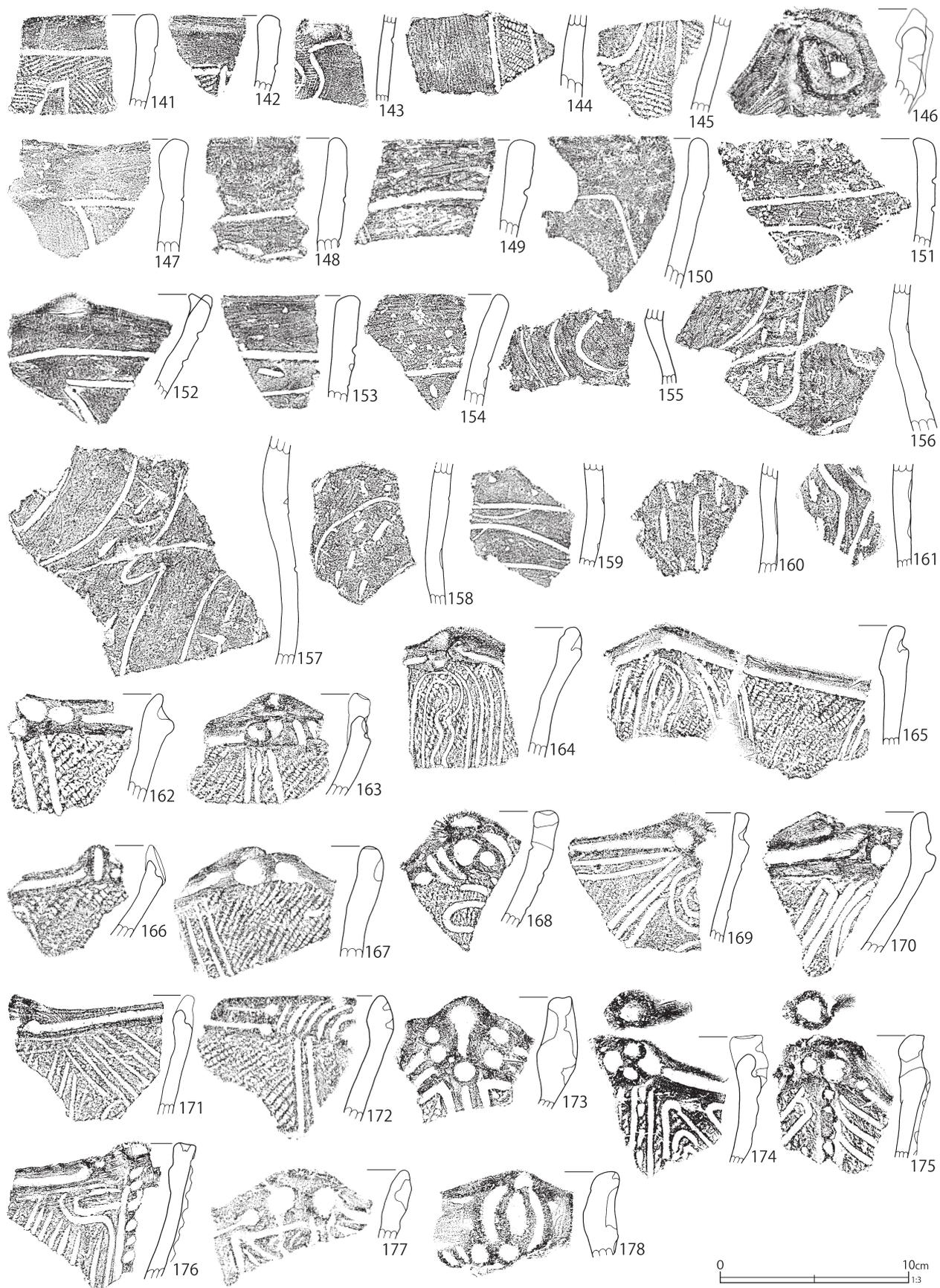
第133図 東斜面出土遺物 (3)



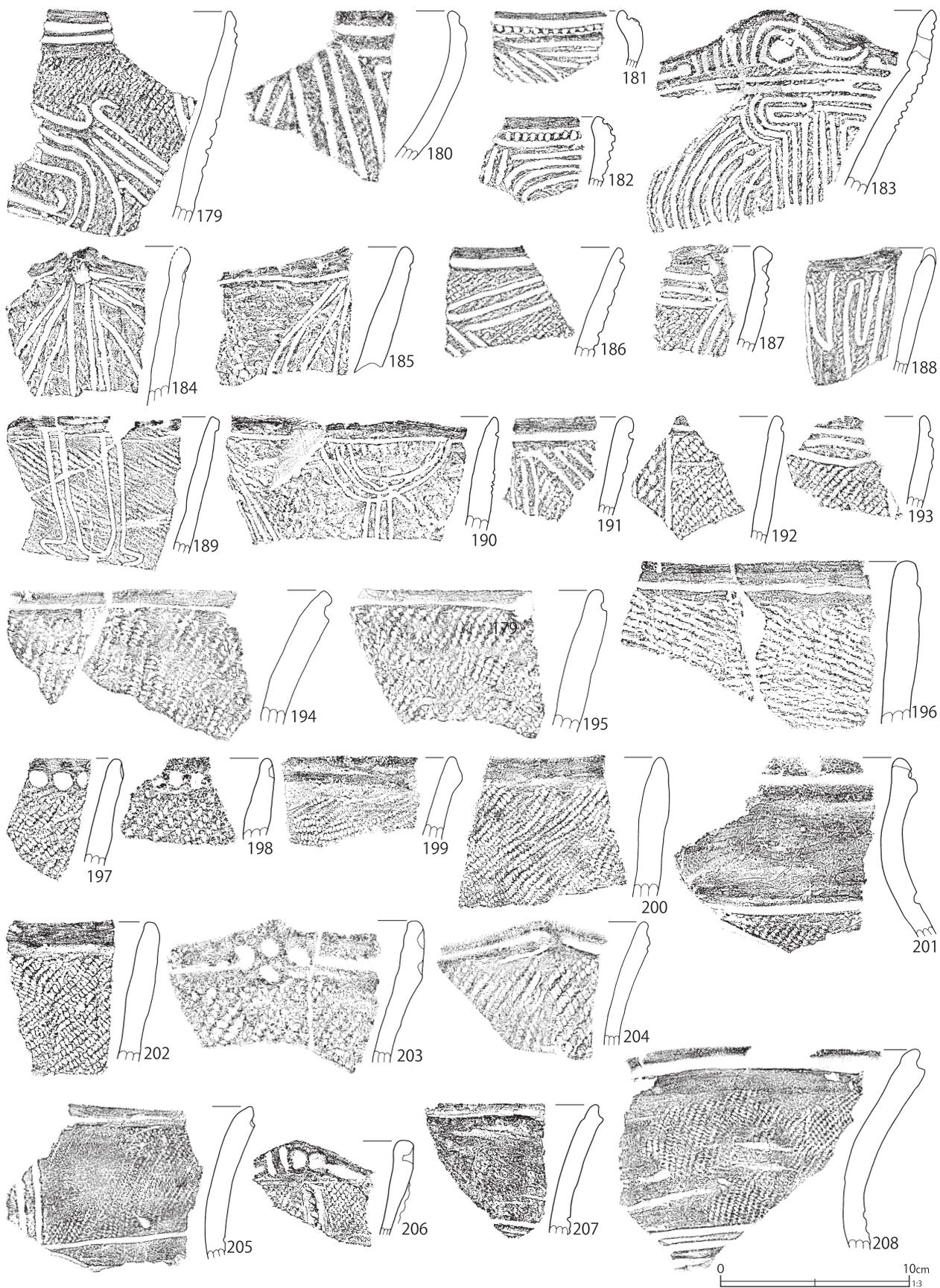
第134図 東斜面出土遺物 (4)



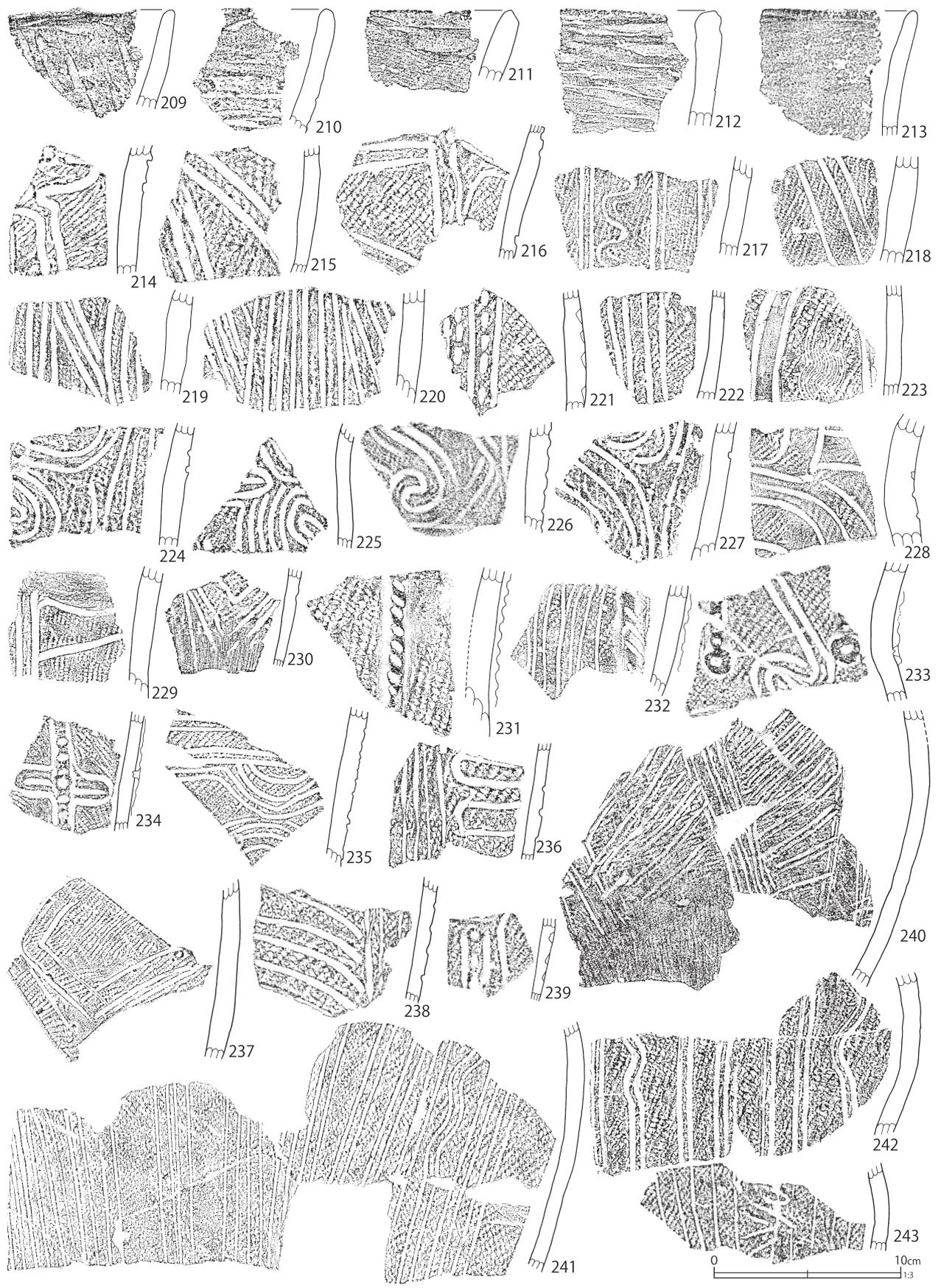
第135図 東斜面出土遺物 (5)



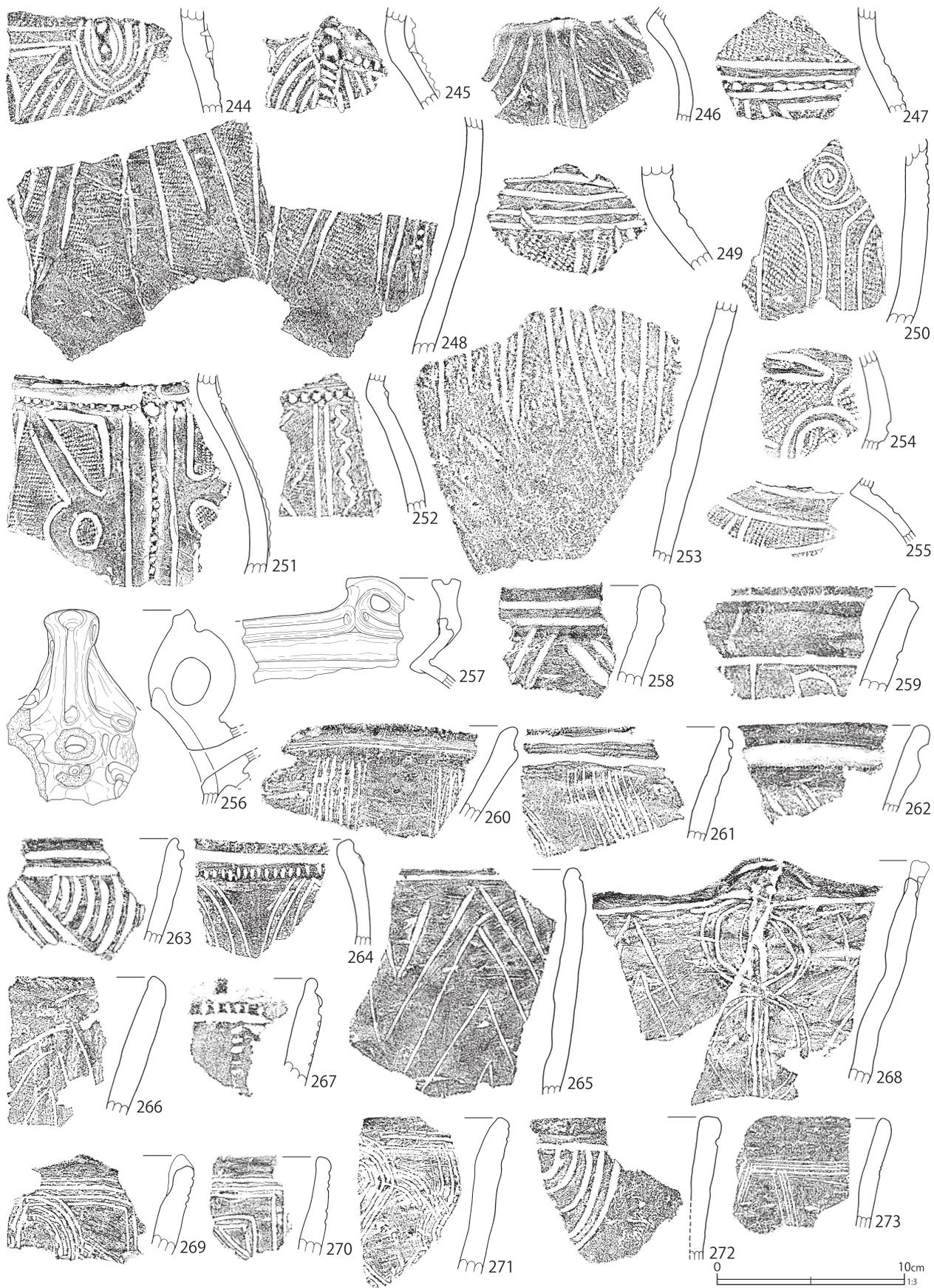
第136図 東斜面出土遺物 (6)



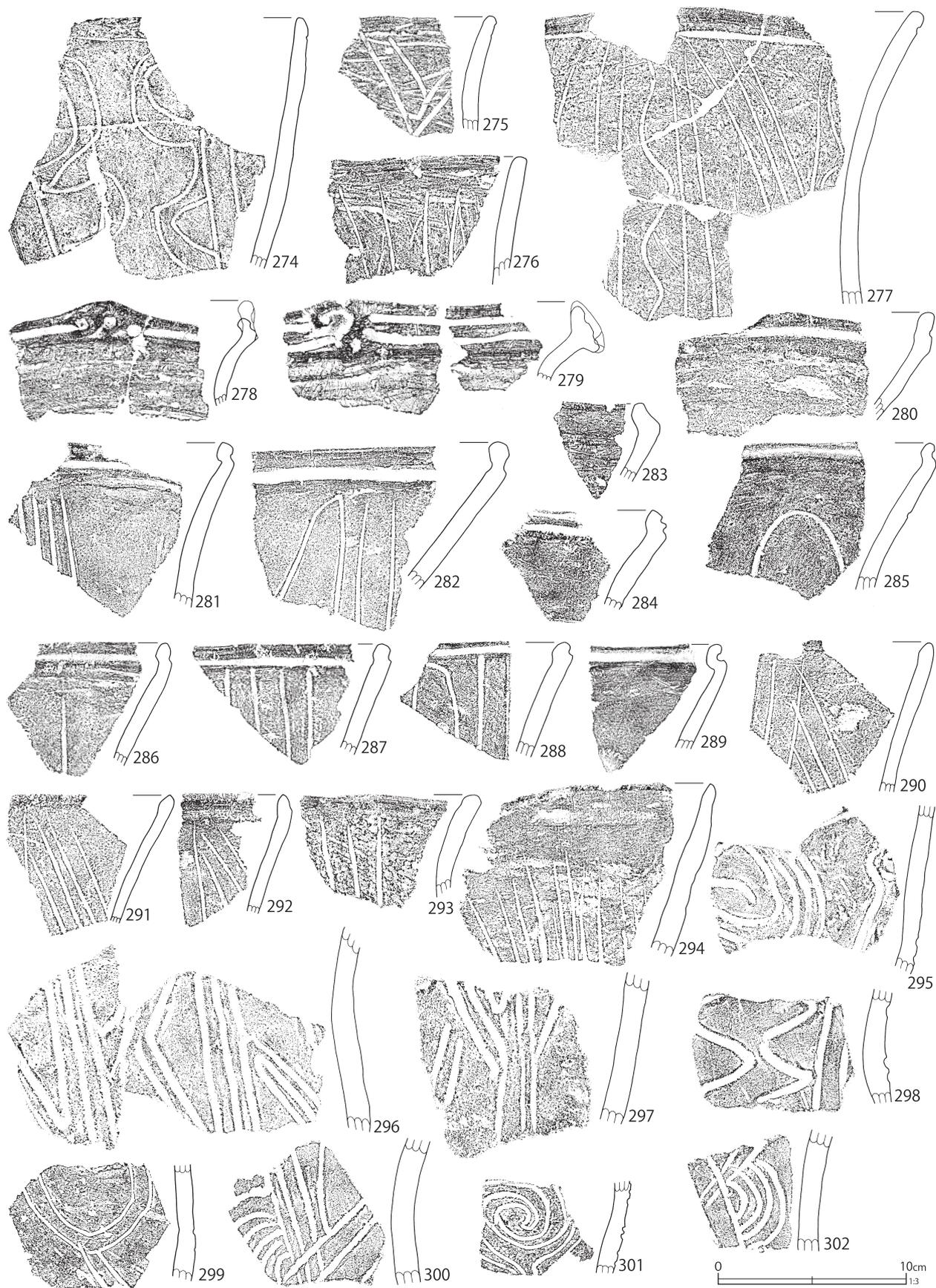
第137図 東斜面出土遺物（7）



第138図 東斜面出土遺物 (8)



第139図 東斜面出土遺物 (9)



第140図 東斜面出土遺物 (10)

配し、279では、綱取式のモチーフに類似した、起点に円形刺突を伴うC字状文を持つ。内折する口縁部には、二本沈線を巡らせる。

280~289は口縁部が外反し、端部が内屈する土器で、283を除き口端部外面に沈線が巡る。284では沈線は二本である。文様は単沈線によるものが多く、縦線や弧線を描出する。280・284・289は無文である。

290~294も地文に縄文は無く、口端部は内屈せず、沈線も持たない。文様は縦線を基本とするが、下方から上方へ払うように描出する特徴がある。

295~310は無文地に沈線で文様を描出する胴部破片である。沈線は、太い単沈線、細い沈線、二本一組の平行沈線(308・309)があり、これ以外では刻み隆帯(304)や円形刺突(306)、櫛歯状工具による条線(310)等がある。310では櫛状工具をコンパス文風に施文する。

311は緩い波状口縁を呈し、外面は無文で内面に1対の円文を持つ。鉢であろうか。

312~322は、縄文を施文する堀之内2式の深鉢である。312~315は磨消縄文の文様を持つ土器群で、外反する口縁端部が内屈し、その外面に沈線を持つ深鉢である。312の文様は三本一単位の沈線である。313は二本の沈線による縦位区画と、逆U字文内以外の全面に縄文を充填する土器である。314は直線的、315は曲線的なモチーフを持つ。316~318は縄文地に沈線で文様を描出するもので、316は三角形文、317は曲線的モチーフを描き、縄文は磨消さない。318は8字状貼付文を直下に単沈線が垂下し、重弧線を対向させる。319~322は口縁端部が内屈しない、堀之内2式の口縁部である。321・322には8字状貼付文が見える。

第142図323~360は口縁部が外反し、口端部は内屈する堀之内2式の平口縁深鉢である。323~340・341・347は口縁部に刻み隆帯が巡り、327・332・333を除き、刻み隆帯を跨ぐ位置に8字状貼付文を持つ。刻み隆帯の位置が口端部寄りの土

器(325・329・331・336)では、貼付文の位置でごくわずかな小波状となる。341は刻み隆帯が二段巡り、342では刻み隆帯からの派生か、内屈した口端部に刻みが入り、側面観では端部が漣状に波打つ。竹管状工具を器面に対して水平方向から刺突する円形竹管状のもの(323・324・326・329等)と、棒状工具の腹を縦に当てる押圧状のもの(327・336・347等)、斜位に当てる刻み状のもの(左傾332・335・347等、右傾337・338)がある。329では口端部の内屈が無い。338は内文を持つ。

胴部文様は、323~329は磨消縄文で三角形文を描くもので、8字状貼付文を施すものではこれが基点になる。330~335は磨消縄文による三角形文を基本とし、区画内を多重沈線で充填するものである。概して小型で、色調は黒色、焼成は堅緻なものが多い。施文は器面の乾燥が進行した段階のためか、硬質な印象を持つ。335~337・341は曲線的なモチーフをもつ一群である。8字状貼付文を施すものでは、これが必ずしも文様描出時の基点とはならない。340・342では8字状貼付文を磨消縄文帯が避ける構成を取っている。

343~346・第143図348~360は、口縁部に刻み隆帯を持たず、胴部に三角形文をはじめとする幾何学文や曲線モチーフを描くものである。平口縁を基本とするが、351や356等小波状もある。355は内文を持つ。356~358・360では、区画内への縄文充填ではなく、縄文地に文様を描出し、磨消さない。360は不規則なモチーフである。361・362は同一個体で、焼成は堅緻、器面のミガキも丁寧である。乾燥の進んだ段階で施文したためか、硬質な印象を受ける。364・365は胴部下半が張る器形である。366~370も器面は平滑で、やはり硬質な印象を受ける。361・362も含め、半円状の棒状工具を器面に浅く当てる様子は、他に比べてやや異質である。

372~374は器壁が薄く、施文具も細い、小型の土器である。縄文帯による区画、内部への多重沈

線による充填で共通し、372・373は重圏文を持つ。

375～第144図383は曲線文を持つ土器で、382・383は渦巻文を持つ。

第144図384・385は縄文地に三角形文を持つもので、385は第143図356と同一個体である。

386は地文縄文に二本の並行沈線で文様を描く。

387～390は上面に刻みを持つ隆帯を施す。387は無文地で、388～390は地文縄文である。388・389は器面の状態がやや異なるが、同一個体ないしは同類の土器である。緩い波状口縁の波頂部のみやや内折し、口端部を刺突して刻み隆帯を垂下する。390は隆帯の起点に円形刺突を持つ。

391～394縄文地に縦位の多条沈線を施す胴部破片である。

396～407は縄文地文のみの深鉢で、後期前葉の他、前後の時期を含む可能性がある。396～400・402・403は口縁部が外反し、内面に段を持つ特徴から後期前葉期のものであろう。

第145図408～441は縄文を施文せず、沈線のみで文様を描出する土器を一括した。408～410は二本沈線で三角形文ほかを描出する堀之内2式と見られるが、区画内に縄文の充填は無い。409の口縁部に刻み隆帯と8字状貼付文を持つ。410は胴部下半が張る器形である。411～416は縄文帯を伴わず、多重沈線のみで三角形文や菱形文を描出する。414は下方から上方へ払うような多重沈線を、口縁部の横線施文後に描出する。415は縦線を挟み三角形文が対峙する構成で、文様の中央に1対の工具の刺突がある。417は文様帯が上部にある小型の土器である。口端部を平坦に作出する。

418や419は器面を磨かず、後述の443～447のような、塗り壁状の粗い調整を残す。418では蛇行文ないしは弧文を描出する。419では三本一単位の棒状工具で、下方から上方へ払う縦線を施文後、口縁部に二本の並行沈線を描出する。

420・421・423も、下から上方へ払う条線風の沈線を描出後、口縁部の横線を描出する。420・421

は三本一単位の工具で、口縁部の横線も同一工具による。色調は異なるが同一個体であろう。出土地点は30m以上離れている。423は二本一単位の工具による。やはり口縁部の横線を後に描出する。

425～427・434・437は、上記の横線が欠落した土器であろう。425・434・437は二本一単位、427は三本一単位の施文具である。426・427・437は口端部が平坦で、437は口縁部内面に沈線を持つ。

422は、胴部は張らず口縁部が直立する器形で、小型の鉢であろうか。器面を磨き、細い棒状工具による単沈線で文様を描出する。

424は口端部が内屈する器壁の厚い土器で、斜格子文を描出する。

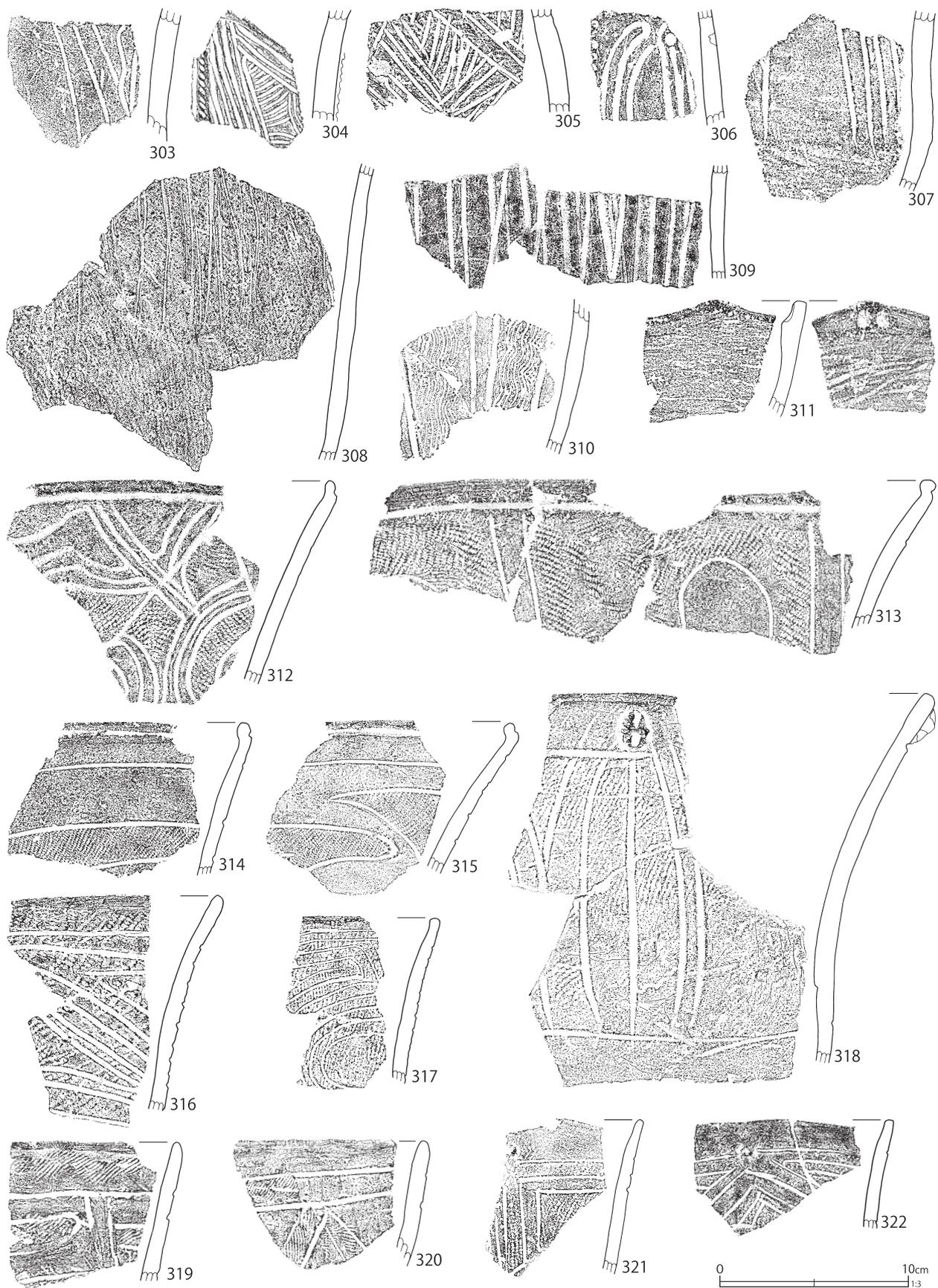
428～431・436は口縁部の横位沈線描出後、胴部の縦線や斜線、U字状文を描出する土器である。

428～430は、口縁部内面にも沈線を持ち、光沢を持つほど器面を磨く。それぞれ胎土と色調が少しずつ異なるが、工具や器面調整、焼成等に共通性があり、同一個体の可能性がある。隣接グリッドで出土している。431・432・436は、口縁部の横位沈線を先行施文する点において、前述の420・421・423とは本質的に異なる。

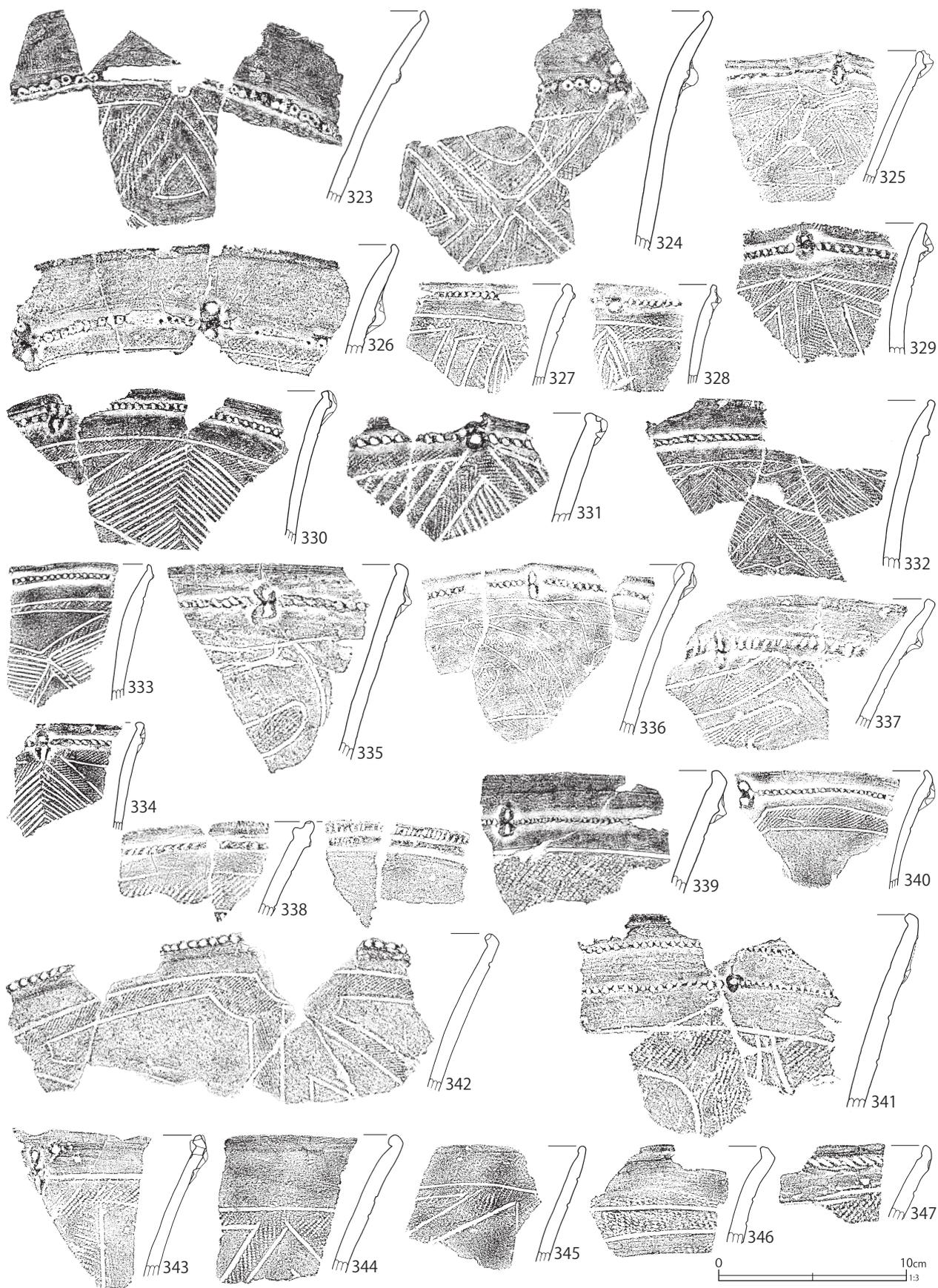
433は口縁部内外面に横位沈線を施す。435は口縁部沈線と胴部文様の新旧は不明だが、上方へ払うような沈線を描出する。

438～441は縦方向の刻み隆帯を垂下する土器で、438は第144図387と同一個体の可能性が高い。439は頸部で括れ、口縁部が外反し端部付近でやや受け口状になる。頂部を欠失するが小波状となるらしく、波頂部から刻み隆帯が垂下するのである。頸部の刻み隆帯との結節点には円形刺突を施す。胴部以下にも刻み隆帯が続くようで、円形刺突を基点とするための沈線が見える。440は口端部が内屈する口縁部で、441は横位沈線を多条に施す頸部である。ともに起点に刺突を施す円形貼付文を伴う。

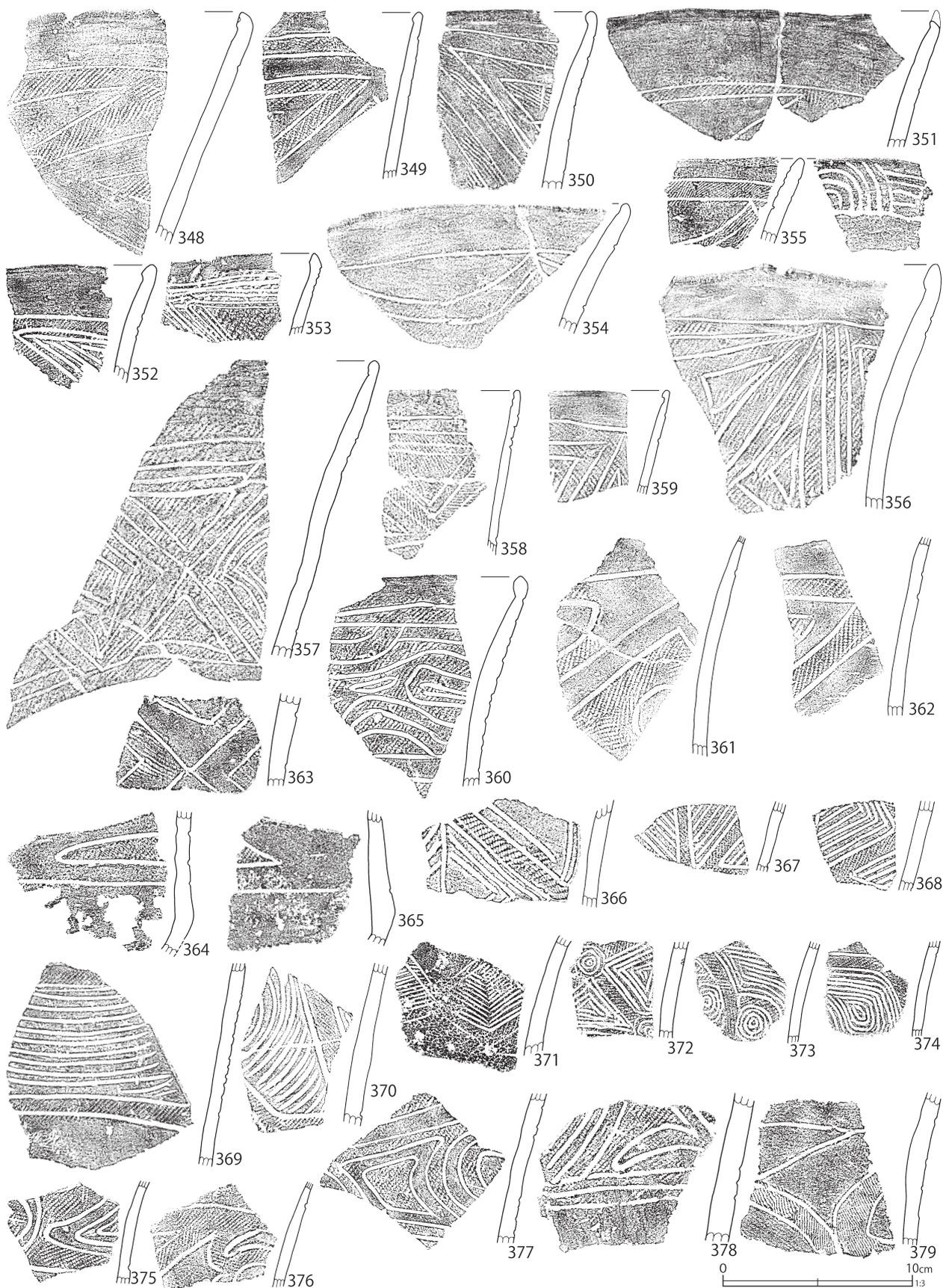
第145図442～第146図459は堀之内式に伴う無文



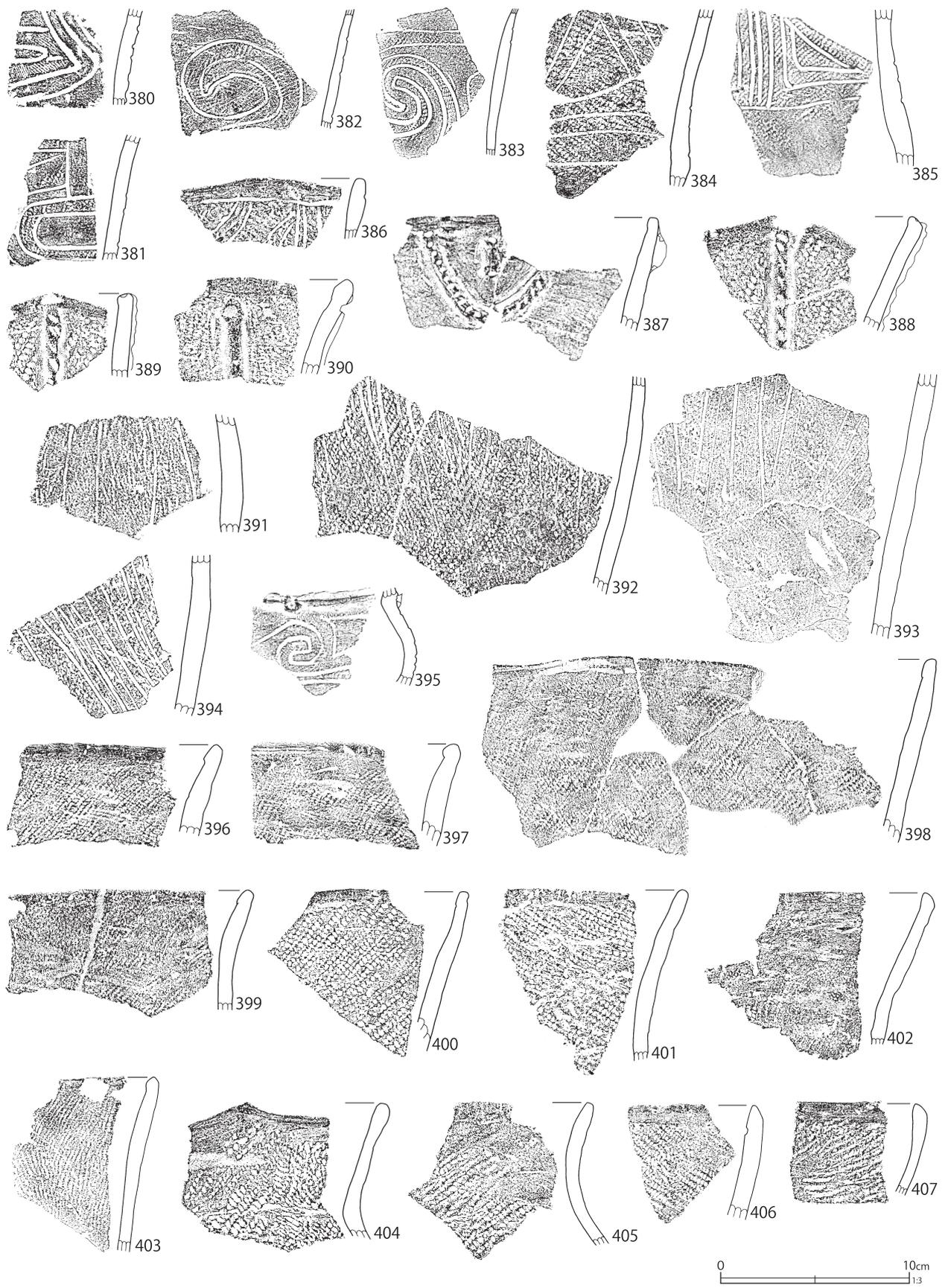
第141図 東斜面出土遺物 (11)



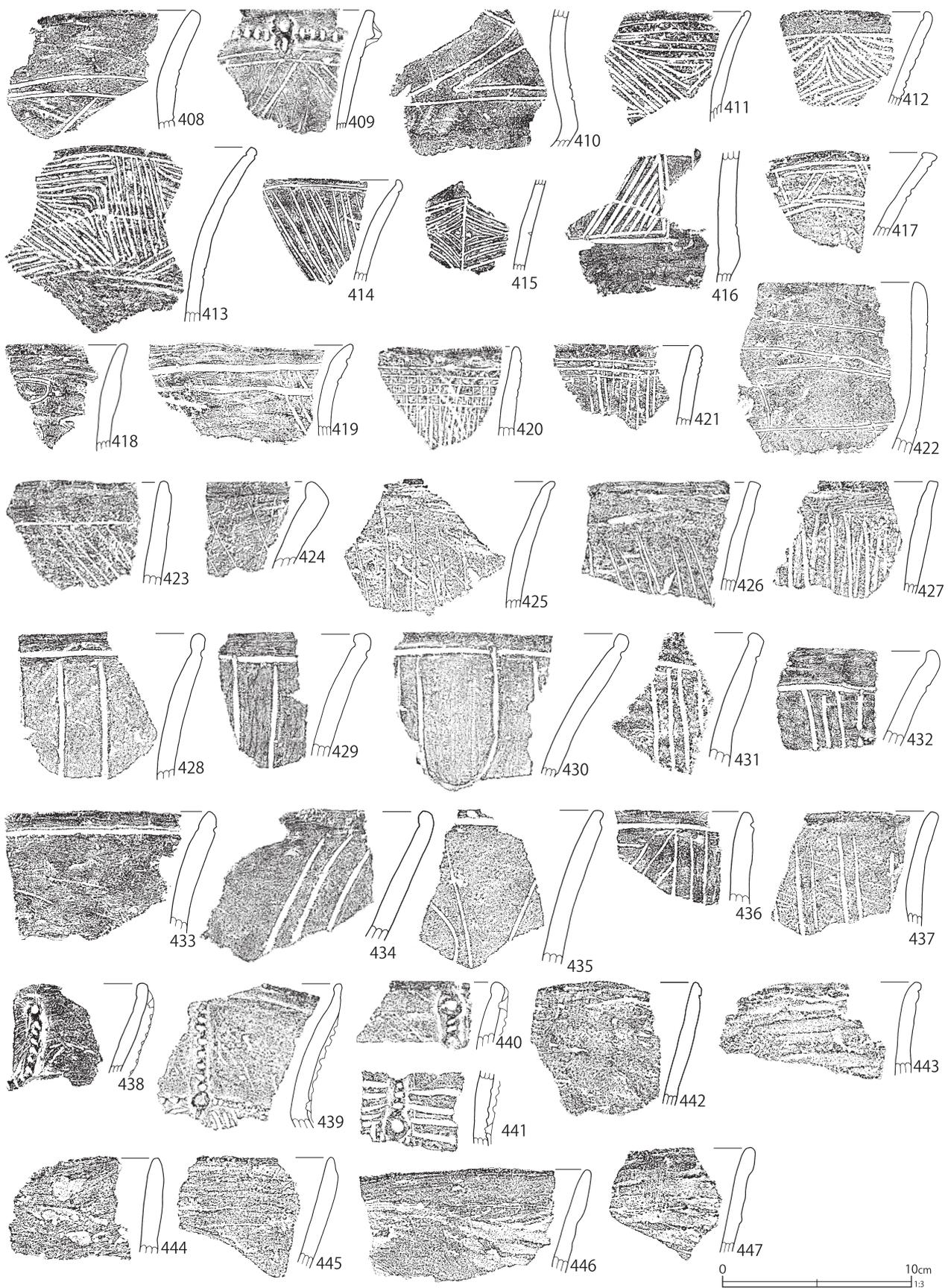
第142図 東斜面出土遺物 (12)



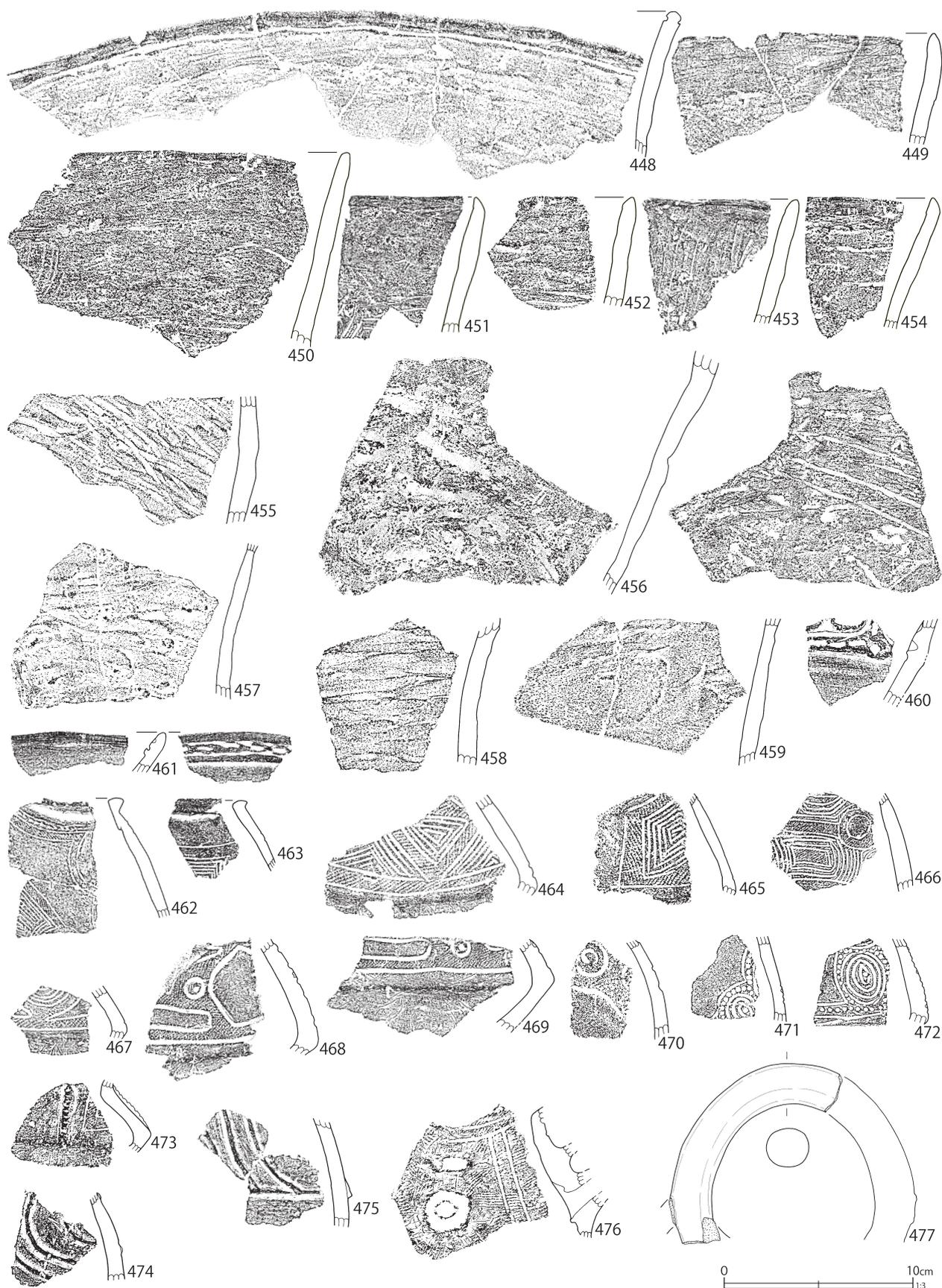
第143図 東斜面出土遺物 (13)



第144図 東斜面出土遺物 (14)



第145図 東斜面出土遺物 (15)



第146図 東斜面出土遺物 (16)

の深鉢である。器面の最終調整はミガキではなく、443・446・447・455・457・458等では、器面を必ずしも平滑にせず、指頭整形の塗り壁のような粗い調整が残る。448は口縁部内外面に沈線を施す。451・454では口唇部がわずかに内屈する。456は内面に棒状工具によるミガキ状の痕跡を残す。

460～477は深鉢以外の土器を一括した。460・461は浅鉢で内文を持つ。

462～476は注口土器で、462・463は口縁部、476は注口部、477は把手である。また、464・465・467～469、472・473は胴部の屈曲部である。462・463は口端部が外屈する。施文工具は概して深鉢のそれより細く、また意匠も細かく、充填される縄文も節が細かい。462～466では、乾燥の進行した段階で施文することで、硬質で堅緻な印象を持たせている。462～464の文様は、縄文帯で三角形や菱形等の幾何学文を描出し、単位文間を多重沈線で充填する。色調も黒褐色を帯び、注口土器のほか、比較的小型の深鉢（第143図372～374等）に見られるモチーフであり、製作技法である。471・472は沈線と列点で文様を描出する。胴部の屈曲部に沿って二本の沈線区画内に円形刺突を充填し、同心円文の外周にも円形刺突を充填し、中心にも円形刺突を施す。

468・469は磨消縄文による文様を描出する注口土器で同一個体である。中央に竹管状工具による円形刺突を伴う円文を描出する。文様は精細さに欠けるが、ミガキは丁寧で、器面が乾燥し硬質になった段階で縄文を充填する。

473は胴部屈曲部に横位区画線が無く、刻み隆帯は屈曲部付近でそのまま収束する。474・475は胴部最大径に微隆起線の横位区画を持ち、そこから三本単位の微隆起線で胴部に渦巻文を持つ注口土器ないしは壺であろう。器面を丁寧に磨き、光沢を放つ。474は外面に炭化物が付着する。476は注口部で、地文縄文に二本沈線で頸部を区画し、注口部を挟み対向する位置に胴屈曲部まで平行沈

線が垂下する。

477は注口土器の把手で、加曾利B式か。

第147図478～511は加曾利B式土器である。478～481は横帯文構成を持つ深鉢で、478は内文を持つ加曾利B 1式の波状口縁深鉢である。479・481は口端部に刻みを持つ波状口縁深鉢で、口縁部内面に段を持つ。481は区切文を持つ。480は口端部が内屈する横帯文の深鉢で、沈線区画内は列点である。482・483は内傾して立ち上がる、加曾利B 2式の口縁部破片で、器面は光沢を放つほど丁寧に磨く。483は（ ）の区切文を持ち、口縁部には微かにLR縄文が見える。484は加曾利B 2式の波状口縁深鉢で、波頂部から綾織り沈線文を垂下して区切り、口縁部内面にも対弧文を施文する。485は横帯文に対する縦線の区切文を施文する。486・487の横帯文は曲線化している。488の口縁部は内側に肥厚し、内面に段を持つ波状口縁で、波頂部は心から外れた位置に非対称の押圧を加え、口唇部の一部を内屈させる。波頂部下には縦長の瘤を貼付する。器面はミガキが丁寧である。489は加曾利B 3～曾谷式の波状口縁深鉢で、大きく外反し、口縁部付近で顕著な変曲点を持つ。口端部はやや肥厚し内削ぎ状となる。490は口縁部がやや肥厚する後期後葉の平口縁深鉢である。

491～496は口縁部に押圧隆帯の巡る加曾利B式の紐線文土器で、491・492は波頂部の心をずらした位置に押圧を加え、左右非対称としている。491の波頂部には中央の窪んだ円形貼付文を付し、直下よりコンパス文を垂下する。491・492ともに地文縄文に二本の並行沈線で文様を描出し、口縁部内面に浅く幅広の沈線二条が巡る。491の内面には、波頂部同様の円形貼付文を配し、492には右非対称に円文2個を配す。493には三山の突起を付す。波頂部からは、コンパス文とは呼べない、波状の平行沈線が垂下する。494・495は二本一単位の平行沈線で、コンパス文を垂下する。497は斜格子目文土器で口縁内面に沈線が巡る。